

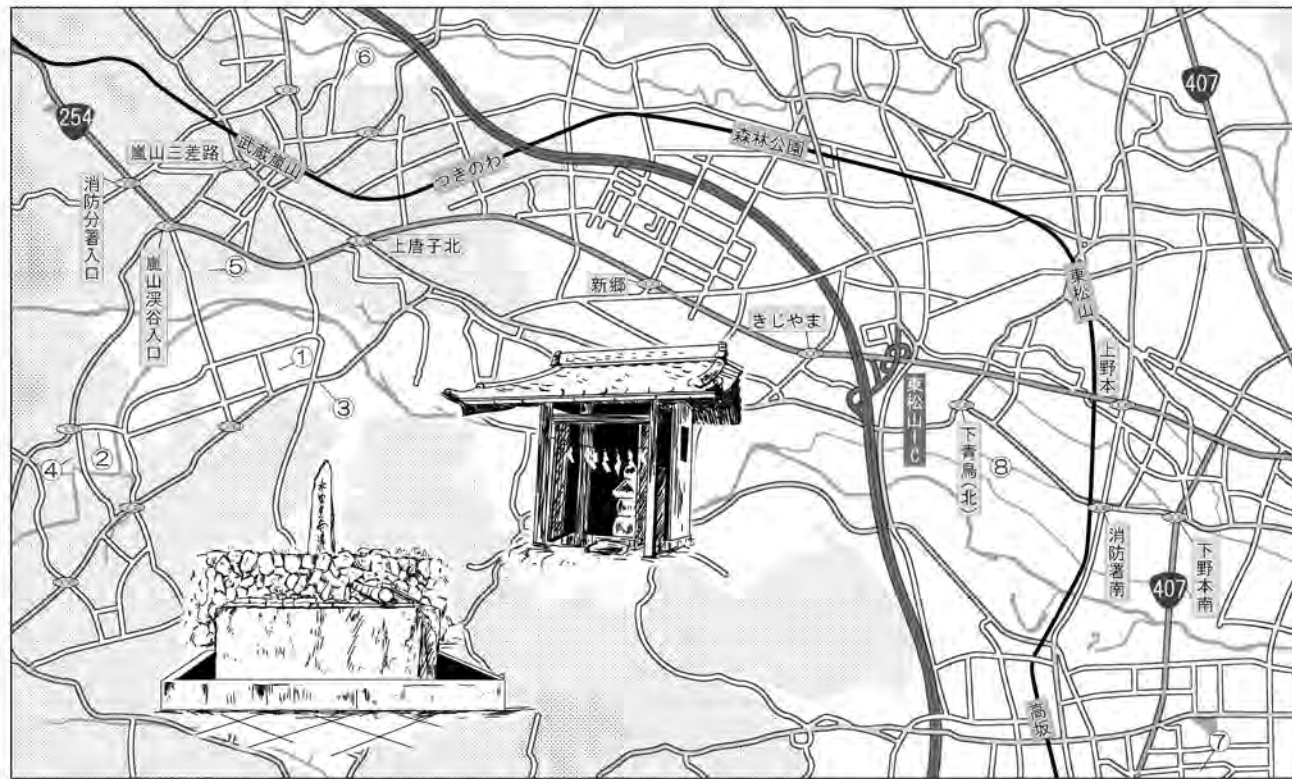


義仲・巴出世街道マップ

木曾義仲といえは長野県のイメージが強いが、実は埼玉県の出身と言われている。源氏の御曹司でありながら地方で生まれ育ったには、同族の中で勢力争いが大きく関わっている。源氏は平氏と並び、都を守ったり地方豪族の反乱に將軍として派遣されたりする軍事貴族だった。東北で一〇五〜一〇八七年の間に繰り広げられた前九年・後三年の役で源頼義・義家親子が活躍したことから都での地位を高め、反乱を共に戦った地方の武士達とも深い絆を持った。そのため埼玉県内には源義家の伝説やゆかりの神社が点在している。

義仲の父は源義賢といい、源義家の跡を継いだ源為義の次男で、帯刀先生（タテワキセンジョウ）を務めていた。これは皇太子の親衛隊長というべき役柄で、義賢は源氏の代表として都での活躍を期待されていた事が伺える。しかしライバルである平氏が貴族としての栄達をはじめると、対する源氏の地位は下落していった。その上、家臣や地方武士との関わりを大切にしていた源氏は、貴族の意に沿わなかったために処罰される自分たちの家臣をかばって役職を奪われることが多くあった。義賢も例外ではなく家臣をかばって帯刀先生の任を解かれてしまった。それを知った武蔵国の有力武士・秩父重隆は義賢を北関東に招き、自分の娘を嫁がせて源氏とのつながりを強めようと考えた。しかし南関東は既に義賢の兄・義朝の勢力下にあり、弟の勢力が広がることを恐れた義朝は、息子・悪源太義平に命じて義賢を討ち取らせた。一一五五年大蔵館で起きた悲劇だった。幼き義仲の命は風前の灯と思われたが、心優しき武威武士達に助けられ信濃に向かうことになる。

嵐山町 吉見町 東松山市 ときがわ町



① 大蔵館
義仲の父・源義賢の勢力範囲だったため、幼い義仲や遺臣の伝承が多く残る。
（武蔵嵐山駅2・4km 車8分）

② 鎌形八幡神社
義仲産湯の清水がある神社。義仲は、仁平年間に鎌形館で生まれたと伝えられ、鎌形にあった七清水から水を汲んで産湯にしたといわれている。
（武蔵嵐山駅3・4km 車9分）

③ 源義賢五輪塔
源義賢の墓と伝えられる五輪塔。近くに義賢と義仲、その遺児義次郎とその家臣たちの顕彰碑が建つ。
（武蔵嵐山駅2・4km 車8分）

④ 班深寺
山吹と義高ゆかりの寺。山吹が義仲と義高を追福するために草創したという。境内の裏手に「木曾殿屋敷」「木曾殿清水」と伝えられる場所もある。
（明寛駅3・5km 車10分）

⑤ 菅谷館
畠山重忠ゆかりの館跡。地の利を生かして構築され、鎌倉街道上道の都幾川渡河点を抑えている。現在国指定史跡となっており、昭和四年に建立された重忠の像もある。
（武蔵嵐山駅1・4km 17分）

⑥ 鬼鎮神社
畠山重忠が一八二二年に菅谷館築城のため鬼門避けとして奉った神社。
（武蔵嵐山駅1・1km 13分）

⑦ 御霊神社
悪源太義平を祀る神社。「小代行平の置き文」によれば御霊神社には悪源太義平を祀り、義平の邸は「岡ノ屋敷」と呼ばれた。
（高坂駅2・1km 車9分）

⑧ 青鳥野
源頼朝が信濃へ攻め入った帰路、陣を取ったという場所。
（東松山駅2km 車6分）

⑨ 安楽寺
源頼朝の弟・源範頼ゆかりの寺。岩殿山と号する。平治の乱後範頼が潜在したという。
（東松山駅4・7km 車12分）

⑩ 息障院
源頼朝の弟・源範頼の館跡だったと伝えられる寺。
（東松山駅5・8km 車12分）

⑪ 慈光寺
頼朝に崇敬された寺。坂東における天台宗の大寺院で中世に栄えた。日本三大装経の一つで国宝にも指定されている。一紙本法華経一品経が現存する。後鳥羽上皇や九条家ゆかりの都の有力者が名を連ねている。観音堂の秘仏と伝えられる十一面観音は重忠の念持仏であり、重忠の等身大（一八〇cm）に造られたと伝えられる。
（明寛駅7・2km 車15分）

⑫ 菟日吉神社
義仲の子孫とかがわりが深い神社。「木曾家引略記」によると、義仲の遺児・義次郎らが義仲の死後大蔵館に近い妙賞郷、大河郷に逃れて土着していたが、義仲の霊を祭っていた。一三三四年から十一月二十六日に流鏝馬を奉納するようになったという。この流鏝馬は市川・荻窪・横川・加藤・伊藤・小林・馬場の七氏が始めたという。現在は三年に一度一月の第三日曜日に流鏝馬が奉納されている。
（明寛駅6・1km 車13分）



「市川家系図」によれば義賢の家臣は大蔵館事件後、埼玉県内に散らばった。滑川町福田は家臣八人が落ちのびて開拓したのが村の起こりだと伝えられ、義賢を祀る浅間神社もある。

源平合戦と武蔵武士

関東は独立の気運が高く、古くから多くの武士達が存在していた。坂東八七党と呼ばれる各地の小武士団と、相互に血縁関係を結んだり、対立したりしながら切磋琢磨していた。そんな数多い武蔵武士達の中で源平合戦においてきらめきを見せた人物と言え、斎藤実盛・畠山重忠・熊谷直実の3人である。

秩父氏は開墾を進めるたび地名を名字として分家していき、畠山氏は、秩父重隆の子・重能の時代に畠山（現・深谷市）に移住したことからはじまる。当時の秩父氏は武蔵国留守所総検校職をめぐって秩父氏と畠山氏が対立関係にあり、大蔵館の戦いにも影を落としていた。悪源太義平に「義賢の子を見つけたら殺せ」と命じられた畠山重能は幼い義仲を見つけたものの義仲の母や秩父重隆の顔が浮かび殺すことができなかった。そこで武蔵から他地域への交通の要衝・妻沼の地に館を構える斎藤実盛に義仲を託したのだった。ほどなく義仲は信濃国に向かうことになる。

こうした畠山と斎藤の行動は悪源太義平にも、父・源義朝にも気付かれることはなく、二人は保元の乱で源義朝の旗手で熊谷直実らとともに戦った。しかし、義朝・義平親子は続く平治の乱で命を落とし、武蔵武士は武蔵守となった平家に従うことになる。

源平合戦の時代、武蔵国は源義朝・義賢、平家、そして源頼朝と支配勢力がめまぐるしく移り変わった。斎藤実盛は平家に仕えたまま命を落とし、畠山氏は父・重能が平家、子・重忠が源氏でそれぞれ戦った。熊谷直実は源氏から平家へ、そしてまた源氏へと旗を変えたが、戦の虚しさを知り仏門に入ってしまう。戦に翻弄されたようにも見える武士達だが、その生き様を見ると「自力救済」の世を己の思い一つで戦い抜いた潔さが感じられる。



熊谷市 深谷市

斎藤実盛、熊谷直実、畠山重忠の本拠地があったため、さまざまな伝承地が残る。

① 妻沼聖天山

（熊谷駅11.1km 車19分）

斎藤実盛ゆかりの寺院。先祖にあたる藤原利仁将軍が歓喜天を信仰したことから斎藤実盛が一七九九年に聖天山を奉った。後に子孫らによって別当寺も造営され、現在まで当時の錫杖（国指定重要文化財）が残されている。江戸時代には地元の人々の熱意によって四十四年に渡る歳月をかけて日光東照宮を思わせる造営らしい彫刻を施した門や本殿が素晴らされた。平成の世になって修復が行われ豪華絢爛な彩色が再現され、国宝に指定された。妻沼一帯は「長井庄」と呼ばれ、斎藤実盛が荘官を務める平家の荘園。平家滅亡後は没官地となり、和田義盛の所領となった。

② 長昌寺の椎の木

（熊谷駅9.3km 車25分）

斎藤実盛が鬼門よけに植えた木。

③ 実盛塚

（熊谷駅7.9km 車17分）

斎藤実盛ゆかりの塚。この付近に斎藤実盛の屋敷跡があった。

④ 斎藤塚

（熊谷駅9.3km 車18分）

実盛の子が父の遺物を埋めたなどの伝承が残る塚。

⑤ 熊谷郷

（熊谷駅0.4km 4分）

熊谷郷は熊谷直実の父・直貞が開発領主だった。現在熊谷駅前には直実の像がある。

⑥ 高城神社

（上熊谷駅1.1km 13分）

鎌倉初期に熊谷直実が崇敬したという社伝が残る神社。

⑦ 熊谷寺（ゆうこくじ）

（上熊谷駅0.6km 7分）

熊谷直実居館跡と比定される寺。本尊の阿弥陀如来は蓮生（熊谷直実）が草庵で往生を願ったところ光を放って命終の日を告げたと伝えられ、「証拠の阿弥陀仏」と呼ばれている。



⑧ 蓮生往生の予告

（上熊谷駅2.3km 車7分）

蓮生（熊谷直実）が一〇〇六年八月に「翌年二月に往生する」と村岡の市に札をたてさせ公言したという話が法然上人絵詞に載っている。

⑨ 畠山館跡

（永田駅1.7km 20分）

畠山重忠の父・重能が畠山庄の開発領主となり畠山氏を名乗り居住した。現在は畠山重忠公史跡公園となっている。公園内には「重忠公産湯の井戸」「重能墓」もある。

⑩ 畠山重忠公の墓

（永田駅1.7km 20分）

畠山重忠公の墓と言われる五輪塔。県指定文化財。

⑪ 井棕神社

（永田駅1.5km 18分）

秩父氏は代々秩父井棕五所宮を敬ってきたため、畠山重能の時代に畠山に居を構えた時、井棕神社を勧請したという。

⑫ 満福寺

（永田駅1.6km 19分）

平安時代に開かれた寺。寿永（一一八二〜一一八五）年間に畠山重忠が加藍を整え菩提寺にしたと伝わる。

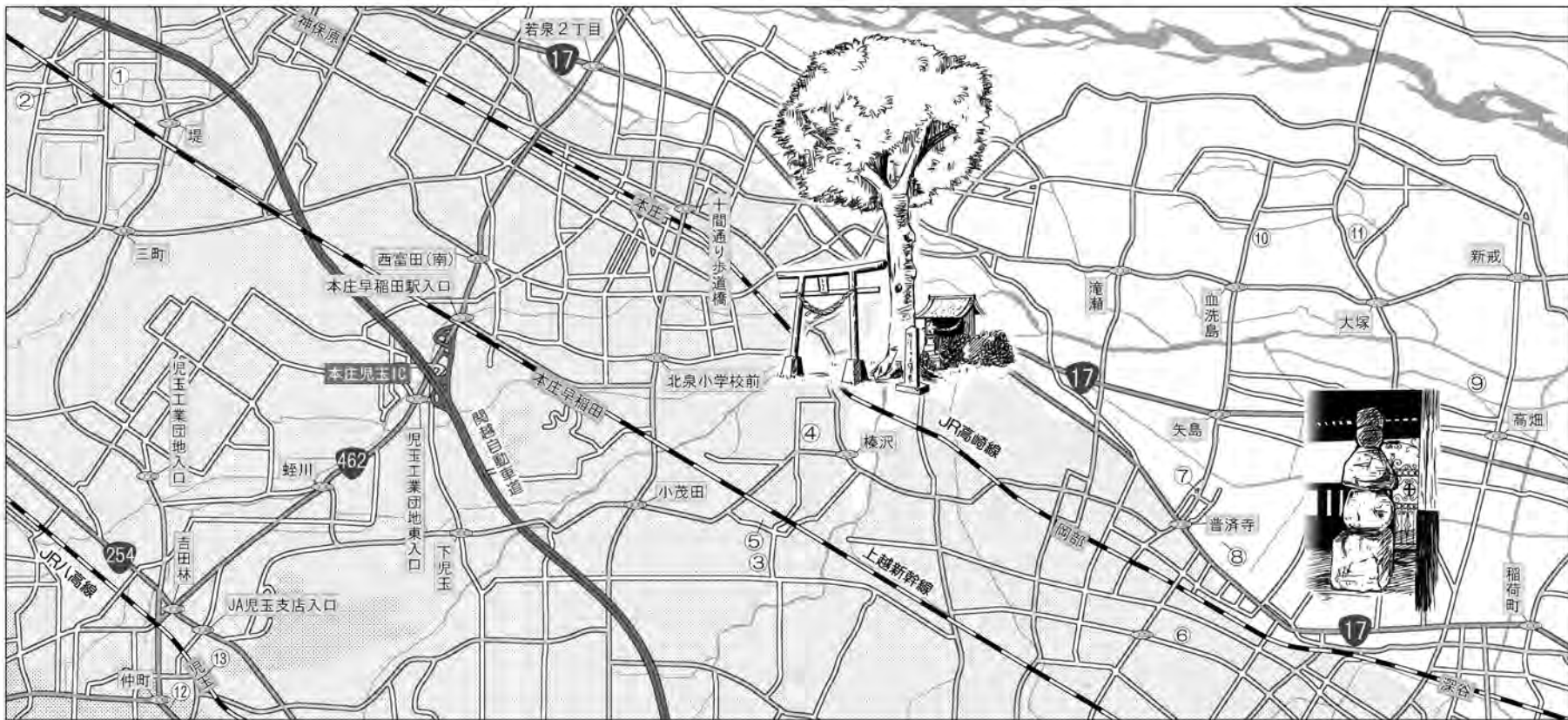
⑬ 鶯の瀬

（永田駅1.8km 22分）

井棕神社の境内の裏手にある。畠山重忠が榛沢成清のもとからの帰り道、豪雨のため洪水で渡れず、ここに鶯が鳴いて浅瀬を教えくれたという「鶯の瀬」がある。

深谷市上里町 秩父市飯能市

埼玉県の北部、西部の山間を中心に、武士達が割拠していた。また、義仲の父・義賢だけでなく、源義家の伝承も多く残る。



① 帯刀(ツテウキ)の由来
(神保原駅2・8km車13分)
久寿年間(一一五四〜五六)に源義賢を葬ったため帯刀と称している地。

② 源義賢宝塔
(神保原駅3・4km車14分)
源義賢の墓と伝えられる宝塔。福昌寺の本堂裏にある。

③ 榛沢六郎成清の供養塔
(岡部駅3・6km車12分)
畠山重忠の最も信頼する家臣・榛沢六郎成清の供養塔。重忠に従い木曾義仲の追討にも加わった。供養塔は、享保七年(一七二二)の建立。県指定旧跡。

④ 榛沢氏本拠地
(岡部駅3・2km車8分)
丹党榛沢氏の名字の地。榛沢六郎成清は平安末期から鎌倉初期にかけて活躍。保元物語や奥州征伐で名前が見られる。二俣川の戦いで畠山重忠とともに命を落とした。

⑤ 東光寺
(岡部駅3・8km車12分)
榛沢六郎が一八六六年に創建した寺。本尊の薬師如来は榛沢六郎が鎌倉から移した。この寺に安置したものだといふ。

⑥ 岡部氏本拠地
(岡部駅2・2km車8分)
猪俣党岡部氏の名字の地。岡部六弥太忠澄は保元物語、平治物語に源義朝方として登場。平家物語では義経に従い義仲の追討に参戦。

⑦ 岡部六弥太忠澄の墓
(岡部駅1・9km車3分)
一の谷合戦では平忠度と討ち取つている。源平合戦終了後は鎌倉御家人として吾妻鏡に名を残している。

⑧ 岡部神社
(岡部駅2・2km車9分)
岡部忠澄に崇敬され、杉を植えたと伝えられている神社。歓喜天を奉る。

⑨ 鷲宮神社
(深谷駅3・5km車14分)
岡部忠澄が鬼門よけの祈願所として創建したといふ神社。高畑地域は岡部忠澄の所領だった。

⑩ 血洗島の由来
(岡部駅4・4km車11分)
源義家の家臣が後三年の役のころ利根川の戦で片腕を切り落とされ、血を洗い流したといふ伝承から血洗島といふ。

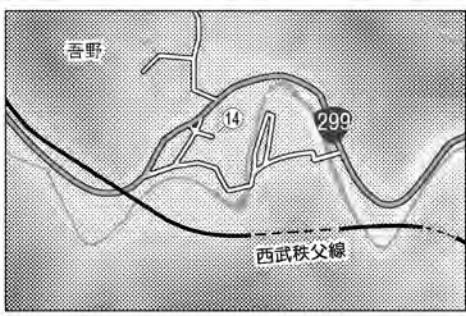
⑪ 下手計(シメテバカ)の由来
(深谷駅5km車12分)
源義家の家臣の片腕を弄ったといふ伝承がある場所。手墓ともいふ。

⑫ 東古清水八幡神社
(児玉駅0・8km車9分)
源義家が奥州征伐の時、山城石清水八幡宮から勧請したといふ神社。

⑬ 児玉党
(児玉駅0・5km車5分)
源平合戦に活躍した武士団。九郷水系の流域に居を構え、金鑛神社の分霊社を置いた。源平盛衰記では、樋口兼光が義仲敗死後生き残つていいた際、源義経に対して児玉党が助命嘆願を行っている。このことから拳兵前から信濃の中原氏と児玉党の間に関わりが推定される。

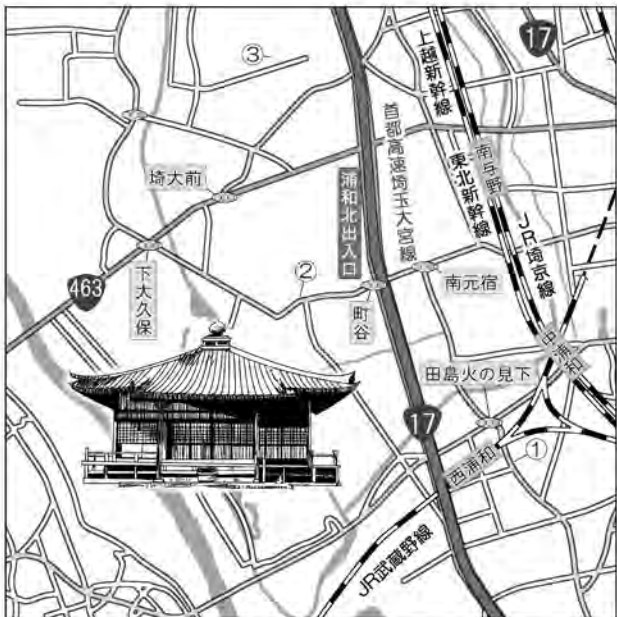
⑭ 我野神社
(西吾野駅1・6km車20分)
畠山重忠・岡部忠澄ゆかりの神社。棟札が多く伝わり、一一九一年に源頼朝の発願により畠山重忠が奉行を務めて「三社大明神」を造営したとあり、一一九七年に岡部忠澄が再興したといふ。

⑮ 秩父氏館跡
(吾野駅7・2km車12分)
埼玉県西部に大きな勢力を誇つた秩父氏の本拠地。秩父氏は中村郷に居住していたが秩父牧の別当を兼ねることになり館を構えた。構築は平安時代末期といわれ、背後に小高い山、前面に谷を控える天然の要衝。



さいたま市

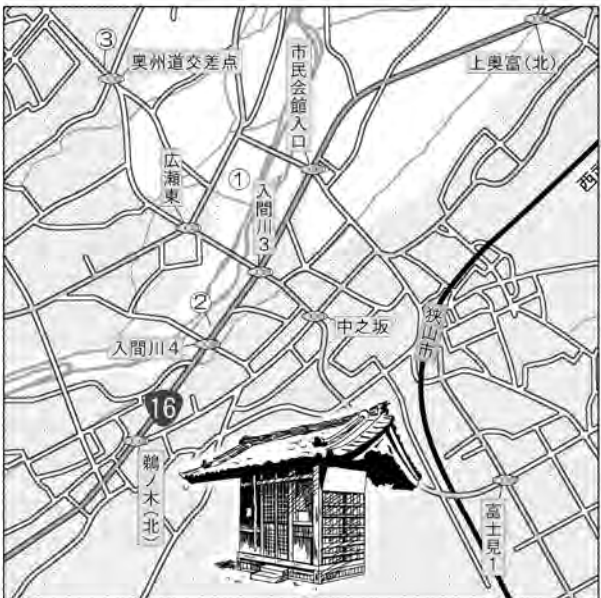
島山重忠にまつわる
寺社が多くある。



- ①如意輪寺観音堂
(西浦和駅0.8km9分)
重忠尊信の霊仏を奉る観音堂。
- ②金剛寺と道場のゆらい
(西浦和駅2.3km車8分)
島山重忠開基の寺。道場といふ地名は重忠が土中から掘り起こした観音を祀る道場(金剛寺)を開いたことにゆらする。重忠の念持仏である聖観音像は秘仏なので常時拝観することはできないが丙午の年に御開帳をしている。道場地区には重忠の屋敷跡があったという。
- ③島山重忠五輪塔
(与野本町駅1.7km20分)
永福寺の中にある五輪塔。水判土荘は重忠の旧領だったと伝えられる。

狭山市

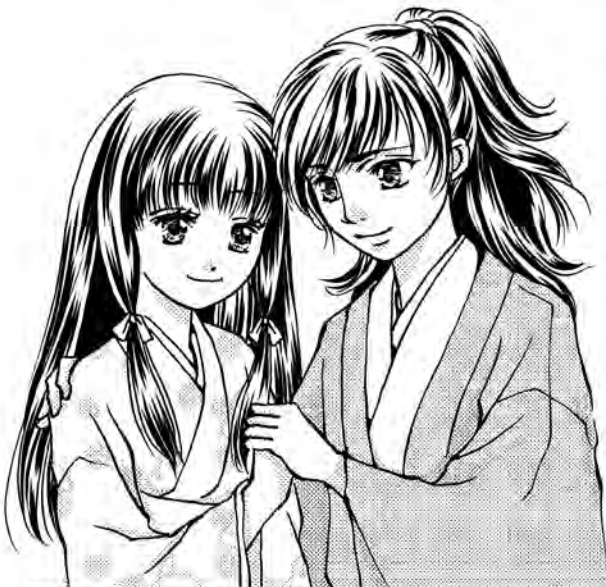
義仲の子・清水義高が
非業の最期を遂げた場
所。奥州・信州への入
り口とも言える。



①入間河原(入間川)
(西武新宿線狭山市駅
0.9km10分)
清水義高が一八四四年に鎌倉から信濃へ落ち延びる際、捕えられ討ち取られたと伝えられる場所。

②清水八幡
(狭山市駅1.2km15分)
清水義高を祀った神社。
「八幡神社縁起」によると、入間河原で討たれた清水義高は、首級を頼朝の実検に供えられた後、鎌倉の常楽寺に葬られた。入間河原においては墳墓を築き身体をおさめ、槻の木を植えて標とした。その後北条政子によって、廟所が祠となり「清水の八幡」として入間河原の近隣鎮護の神として祀られた。政子は追悼の法要を行ったり、神田地を寄付する等したが、応永九年(一四〇二)の入間川増水により、槻の木も砂利に埋もれ、社頭も水に流された。度々洪水により一時期成円寺(現在は廃寺)に遷宮したが、昭和三十四年に現在地へ再建された。

③影隠地蔵
(狭山市駅2.1km25分)
清水義高ゆかりの石地蔵。「新編武蔵風土記稿」によれば、奥州道の入り口に地蔵堂があり、木造の地蔵が安置されていたという。その後、上広瀬の正覚院(現在は廃寺)入口付近にあったが、明治時代頃には元の地蔵堂の位置に戻されたといわれている。いつから石地蔵になったかは不明。清水義高が追手から逃れる時に地蔵の影に身を隠した。等の伝承が残されている。



清水義高と大姫の悲恋

一一八三年義仲と頼朝の間で対立が深まった時、和睦のあかしとして義仲の子・清水義高が鎌倉に送られた。頼朝・政子夫妻は元服したばかりの少年・義高をまだ十歳に満たない幼い娘・大姫の婿として迎えたのである。二人はままたごとの夫婦のように仲睦まじく暮らしていたが、義仲が都に入り、貴族との関係が悪化したころから状況は一変することになった。

義仲を快く思わない後白河院が密かに頼朝に使いを出し、「義仲追討」を命じたのである。頼朝は関東の武士達に鎌倉から離れないように説得され、弟の範頼・義経を旗頭に大軍を都に向かわせた。

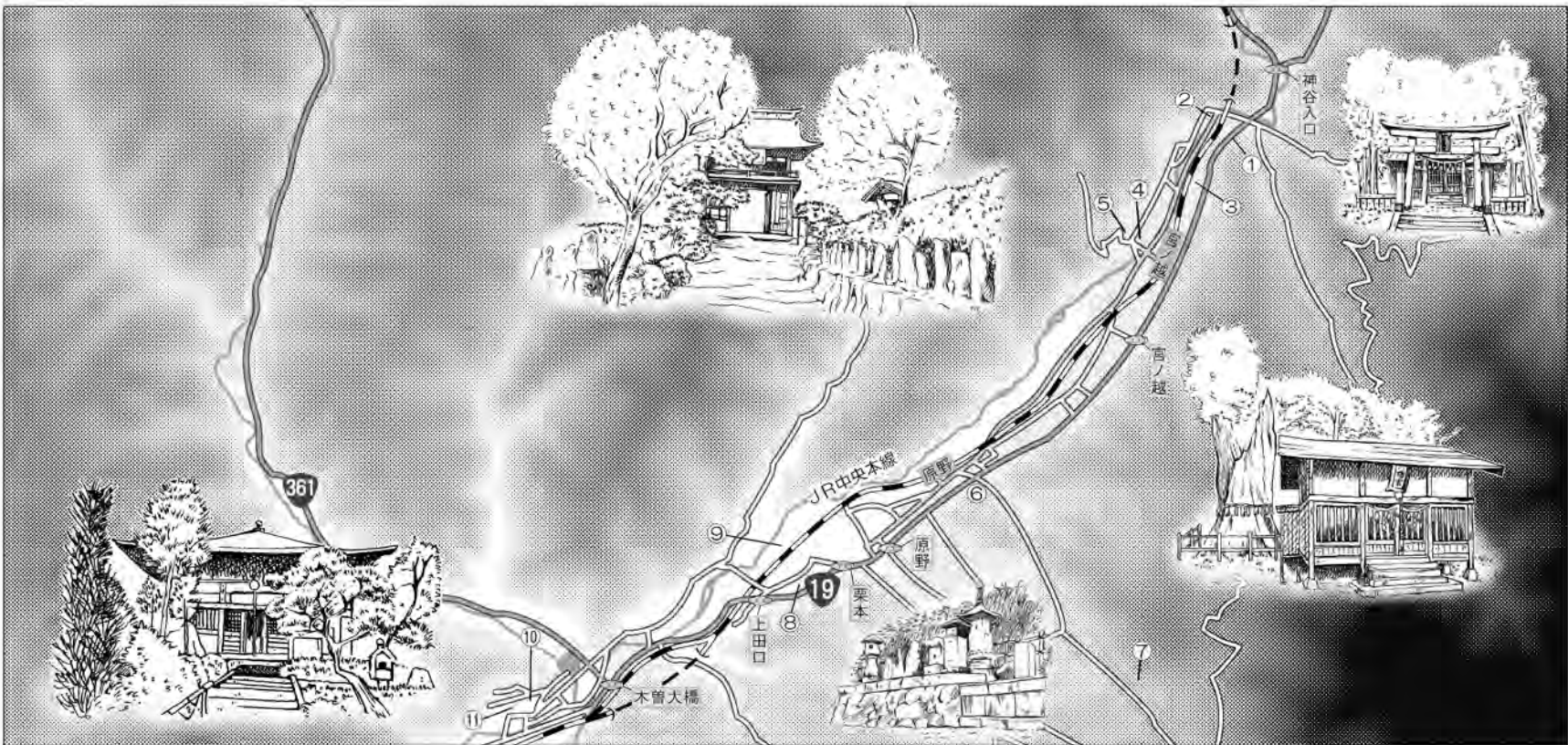
義仲が討ち取られてからしばらく、頼朝は思案を重ねていた。娘・大姫と幼い愛を育んでいる清水義高は自慢の婿である。しかし、その父を討ち取らせたのは自分。このまま義高を生かしておけば、いつ命を狙われてもおかしくない。また義高にその気がなくても、残党たちに祭り上げられることもある。自分も戦で平清盛に父を討ち取られたにも関わらず、恩情をかけられて生き延びることができた。しかし今平氏を倒そうとしている。義高が同じような運命をたどるのではないかという不安は頼朝の中で日増しに募っていった。

ついに頼朝は義高を葬る決意をしたが、それは事前に大姫の侍女たちに漏れていた。義高の家臣・海野小太郎は自ら義高の身代わりを演じて時間を稼ぎ、女装させた義高を鎌倉から脱出させることに成功した。しかし武蔵国まで逃げ延びた義高は入間川に差し掛かった時、追手に見つかり殺害されるに至った。

義高の死を知った大姫は飲食を絶ち、心も病んで、二十歳で生涯を閉じるまで、義高を慕う気持ちを忘れず、二人の物語は室町時代に「しみづ物語」として広まった。そして現代に至るまで舞台、小説、漫画、映像で繰り返し作品化され、多くの少女たちの涙を誘っているのである。

木曾町 南木曾町

義仲が幼少期を過ごした地。父を討たれ武蔵国（埼玉県）から信濃へ逃れた駒王丸（のちの義仲）は信濃権守・中原兼遠に保護され追手から身を隠すため兼遠の息子・兼平・兼光、娘・巴と共に木曾で養育された。義仲と中原兄妹は学問を深め、野山で身体を鍛える中で生涯を共にする深い絆が生まれた。当時をしのばせる伝承をまとった寺社・ゆかりの地・遺物が多く残る。また、木曾には保元・平治の乱で活躍した武士・木曾仲太・弥忠太が住み、義仲の養育に協力したと見られている。



①南宮神社
(宮ノ越駅1・9 km 25分)

義仲が南宮平に城を築いた時、城の傍らに移転させた神社。

②巴淵
(宮ノ越駅1・5 km 19分)

巴に神通力を与えた雷神が棲むという淵。

③旗竿八幡宮
(宮ノ越駅0・9 km 12分)

義仲が平家追討の旗竿げと戦勝祈願を行った神社。この付近一帯に義仲の館があったと伝わる。

④義仲館
(宮ノ越駅0・3 km 5分)

平成四年七月に義仲の功績を讃え建てられた施設。その短くも壮絶な生涯を絵画や人形を使いわかりやすく伝えている。

⑤徳音寺
(宮ノ越駅0・5 km 7分)

義仲の菩提寺。境内に義仲の母小枝御前、巴、兼平の墓があり、資料館に多くの遺品がある。

⑥林昌寺
(原野駅0・7 km 9分)

中原兼遠の菩提寺。当時の物といわれる鉄鍋がある。

⑦光華観音
(原野駅1・5 km 19分)

義仲が築城時に水を引く為に勧請した観音。

⑧手習神社
(原野駅2・2 km 28分)

中原兼遠が義仲や子供たちのために建てた神社。

⑨中原兼遠屋敷跡
(原野駅2・5 km 32分)

「義仲元服の松」がある場所。

⑩興禅寺
(木曾福島駅1・9 km 24分)

義仲が巴に託した遺髪が埋められているという「義仲の墓」や義仲の桜（二代目）がある寺。

⑪長福寺
(木曾福島駅1・5 km 19分)

巴が使ったという長刀がある寺。

⑫巴袖振りの松
(JR南木曾駅2 km 26分)

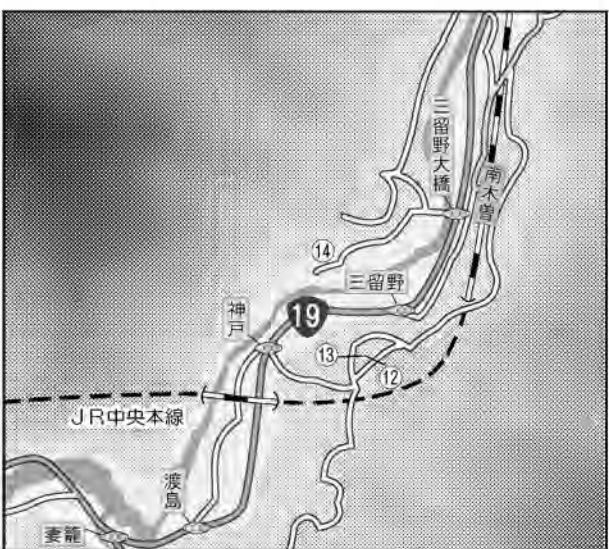
義仲が弓を引こうとした時松が邪魔になり巴が袖を振って松を横倒しにした。その松から芽が出た巨木。現在は切り株が残っている。

⑬かぶと観音
(JR南木曾駅2 km 26分)

義仲が木曾谷の南のおさえとして妻籠に砦を作った時鬼門に祭った観音。

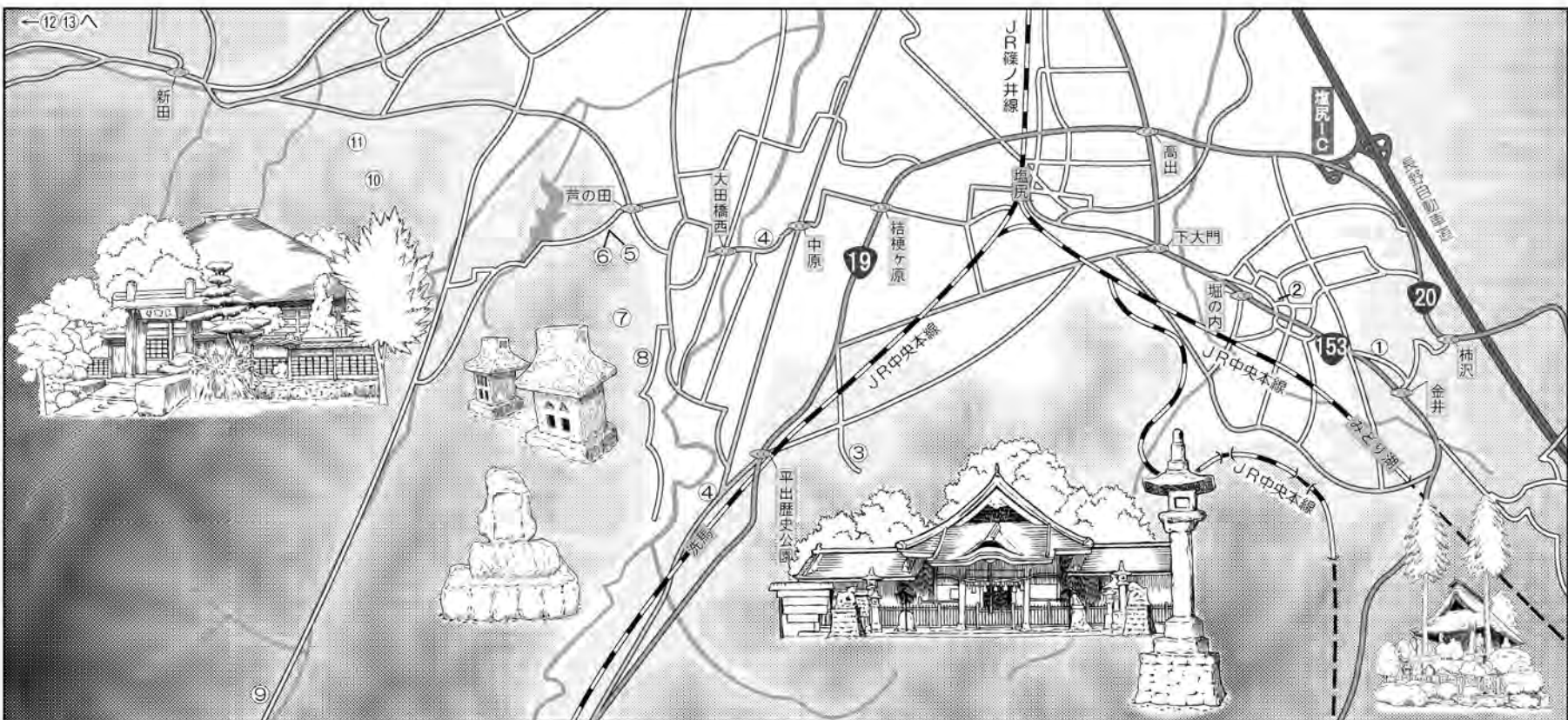
⑭子孫の五輪塔
(JR南木曾駅1・7 km 22分)

義仲の子孫を祭る二基の五輪塔。



塩尻市朝日村長野町

義仲伝承の宝庫。特に少年から青年期の伝承が多く、昔話的なエピソードが残っているのが特徴である。信濃源氏・長瀬氏が登場するものが多いのも興味深い。中原兼遠が国府の職務を通して次第に平家に信頼されるようになったため義仲を木曾で隠しおく必要が減り、山を越えた辰野や塩尻・朝日まで自由に馬を走らせるようになったことの表れではないだろうか。



①永福寺
(J.R.みどり湖駅1.2km16分)
義仲の子孫木曾義方上人が義仲を弔うため建立した寺。本尊の駒形馬頭観音は旭將軍木曾義仲にちなんで、旭観音と呼ばれている。

②阿禮神社
(J.R.みどり湖駅1.8km23分)
義仲の伝承が残る神社。この神社が東山の五百砥岩付近にあったところ、義仲が五百渡の滝に座席を設け、三十七日間参籠し、祈誓したと伝えられている。

③床尾神社
(J.R.洗馬駅2.3km29分)
義仲が戦勝祈願したという神社。

④太田の清水
(J.R.塩尻駅2.8km35分)
義仲と兼平が出会って馬を洗ったという伝承が残る場所。

⑤鏡石
(J.R.洗馬駅4.2km52分)
義仲と従兄弟の長瀬判官代と馬にまつわる伝承が残る石。義仲の馬がいなくなり、長瀬と共に山の中を探していたが見つけた頃にはすっかり夕暮れになっていた。馬に乗って川沿いに帰る途中、急に強い光がさし驚いた馬が飛び上がり義仲も落馬してしまった。光の出所を調べてみると、石に月が反射していたので義仲は鏡石と名付けたというもの。

⑥慈眼山心念堂
(J.R.洗馬駅4.2km52分)
裏山が「鏡石」伝説の舞台。

⑦長興寺
(J.R.洗馬駅3.5km45分)
義仲の母小枝御前の墓・供養塔が残る寺。

⑧東漸寺
(J.R.洗馬駅2.7km34分)
義仲の一族であった長瀬判官代が開基した寺。

⑨馬の足跡岩
(塩尻市大字洗馬周辺)
義仲の馬が滑って踏みとどまった跡と言われるくぼみがある岩。

⑩兼平つがいの泉
(J.R.洗馬駅7.1km89分)
兼平が喉を潤したと言われる清水。

⑪光輪寺
(J.R.洗馬駅7km88分)
義仲が母小枝御前と住んでいたと言われる寺。古く地名は「木曾部(こそぶ)桂入」という。本堂には義仲と兼平の位牌が安置され境内には義仲公手植えの桜や義仲にまつわる伝承が多く残る薬師堂がある。

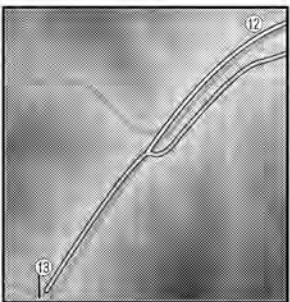
⑫巴足直し様(足無し様)
(朝日村大字古見周辺)
二つの伝承が残る祠。
一つは巴に関わるもので、駒王丸の所に遊びに来た巴が足を痛めたので神様にお願いすると、怪我がすぐ治ったので従者がお礼にわらじを供えたというもの。
もう一つは悪源太兼平の家来が義仲を追ってきた時中原兼遠の家来に捕まり足をさられた末に亡くなったので村人が気の毒に思い祠に祀ったというもの。

⑬義仲公逆柳
(朝日村大字古見周辺)
義仲と兼平の伝承が残る柳。兼平と義仲が小さい頃食べたイワナの味を思い出したイワナの牧から御堂垣外道沿いの川へ出かけた。途中で何本かの柳の枝を太刀で切り落とし、川に着くとその枝をイワナめがけて投げ、串刺しにして何匹か取り食べた。その時使った柳を挿しておいた所、芽が柳として立派な柳の木になったというもの。

⑭小野神社
(J.R.小野駅1.0km14分)
義仲が崇敬し、俱利伽羅合戦にまつわる祭が現在も伝わる神社。現在は御柱祭の際、拝殿の中庭で牛の角を型とった牛松明を燃やす。

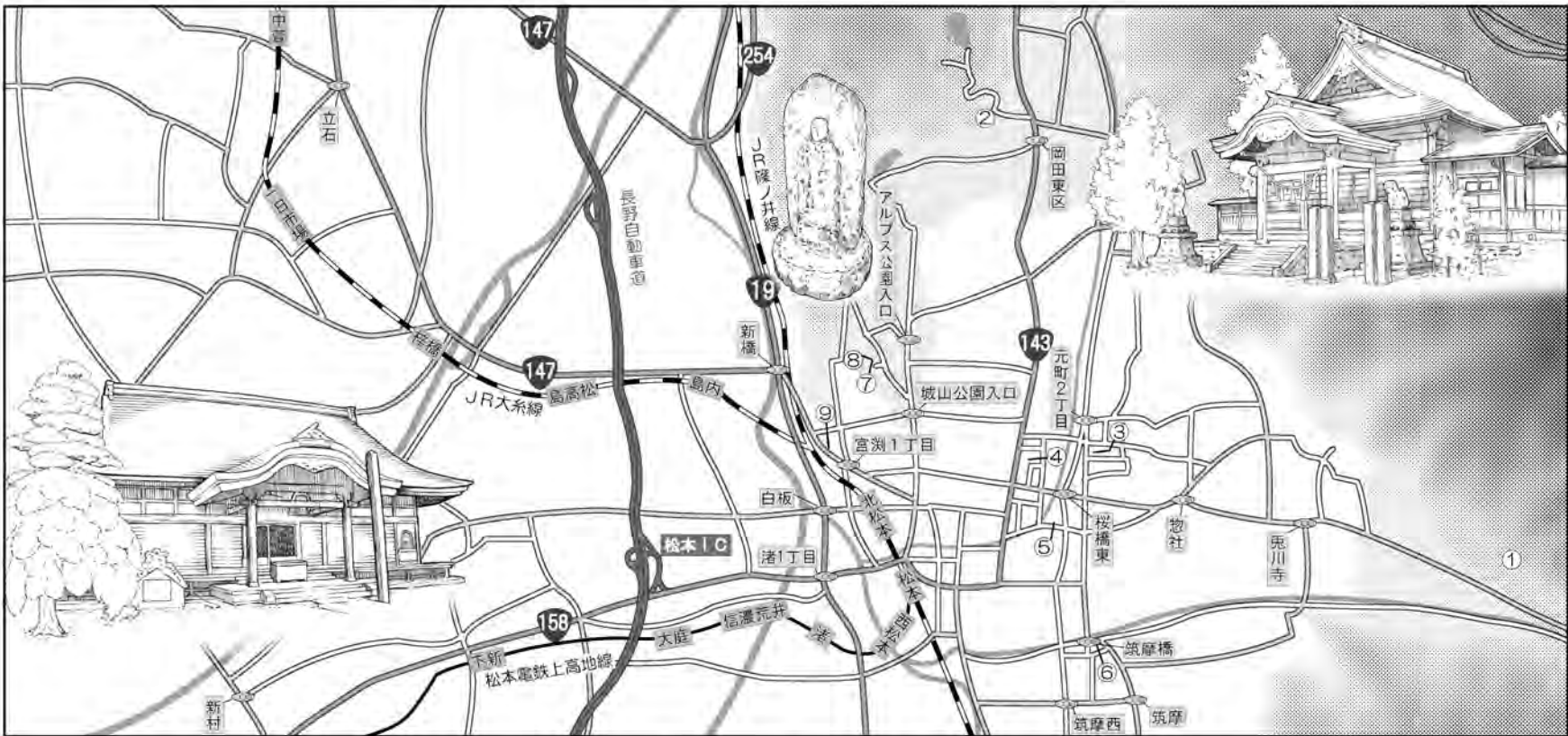
⑮矢彦神社
(J.R.小野駅1.0km13分)
義仲が木曾山林から切り出した材料で社殿を造営した神社。

⑯小野の牧
(J.R.小野駅1.5km19分)
義仲とゆかりが深い牧。牧寄、ませ垣、まみち等の地名が残る。義仲は兼平に命じて小野牧から軍馬を集めようとした。



松本市

松本平には信濃国府があり平安末期信濃の政治の中心地だった。中原兼遠は諏訪大社や滋野一族に信濃の有力者と結んだため信濃国の武士は国府に友好的で、義仲は国府をよりどころに勢力を固めた。岡田地域に本拠地を持つ信濃源氏・岡田氏も義仲に協力を惜しまなかった。また中原兼遠の子・兼平の伝承が密集しており、名字の令井は松本の地名に由来し長期にわたって居住していたとみられる。松本市中心部には巴と義仲の子供にまつわる伝承が多くあるのも特徴である。



① 桐原山道の伝承
(JR北松本駅9.3km117分)
義仲は桐原牧の黒駒に乗り、桐原山道を通って依田城に入ったといわれている。

② 岡田神社
(JR北松本駅4.7km60分)
岡田太郎親義の本拠地付近にある神社。周辺には館跡と推定される地名も残る。

③ 国府開運弁財天
(JR松本駅2.3km30分)
中原兼遠と同じ「つる柏」の家紋を持つ弁財天。周辺は古くから「元屋敷」とよばれていて国府との関連が推定される。この付近には「清水」「旭」などの地名も残る。

④ 長称寺
(JR北松本駅1.9km25分)
義仲の子、義基開基という寺。住職は現在も木曾姓。義仲太刀、義基懐剣が寺宝として伝わる。

⑤ 槻井泉神社
(JR松本駅1.6km21分)
清水義高ゆかりの神社。義仲の子がこの神水を産湯として使い、清水義高と名乗ったという伝説がある。
(塩尻市洗馬にも同名の神社がある)社地に残る大禰の下の泉は現在も清水をたえている。

⑥ 国府八幡筑摩神社
(松本電鉄西松本駅 1.9km25分)
信濃源氏の信仰が篤い神社。信濃国府が松本に移ってからは国府八幡宮と言われる。

⑦ 生安寺
(JR北松本駅1.8km23分)
義仲の子・義高のために造られたと推定されるお地藏様がある寺。お地藏様は松本平で最も古い石仏。住職は「旭」氏。

⑧ 清水丸館跡
(JR北松本駅1.8km23分)
義仲・巴と義高が住んだといわれている地域。遺跡は発見されていないが、松本城普請の際の文献に地名がみられる。

⑨ 落馬観音
(JR北松本駅0.3km4分)
巴ゆかりの観音。松本城主がこの前を通る時は必ず馬から降り、敬意を示した。

⑩ 河光寺
(JR田沢駅7.7km97分)
義仲が兜を置いたという兜石がある寺。

⑪ 諏訪神社
(信州松本空港2.7km34分)
「今井兼平形見石」の碑がある神社。

⑫ 今井兼平形見石
(信州松本空港2.7km34分)
農民が森を開墾した時に発見した石。「今井兼平形見」と彫られている。この石は西の方角だけに動いたため西にあった八幡神社の境内に据え置いたといわれている。

⑬ 宝輪寺
(信州松本空港4km51分)
今井兼平中興という寺。

⑭ 薬師街道
(信州松本空港 スタート地点まで55分)
兼平館と朝日村光輪寺までをつなぐ道。

⑮ 今井神社
(信州松本空港4.5km56分)
住民によって「兼平様」と呼ばれている神社。かつて兼平の居館があったといわれている。

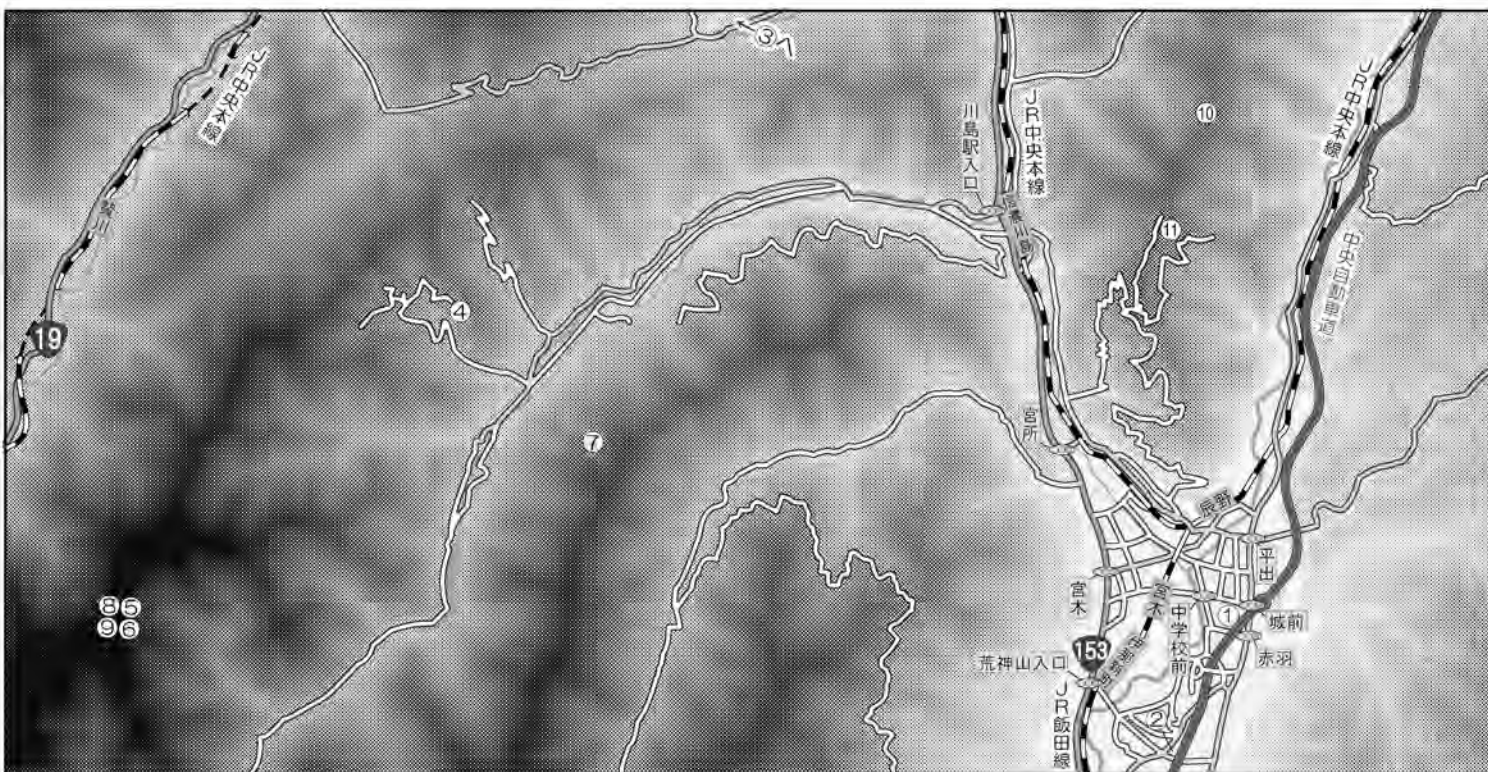


辰野町 下諏訪町

辰野町は背後の山が木曾と通じ「隠し城」をはじめとする伝承が多く残っている。義仲は頼繁に辰野に訪れていたとみられ、中原兼遠の子・兼光は辰野町樋口に屋敷を構えて、樋口兼光と名乗った。兼光の妻は諏訪大社をよりどころとする武士団・諏訪神党の一員茅野氏の娘で、義仲は諏訪大社大祝・金刺盛澄の娘を妻とした。諏訪大社の由緒を記した「諏訪大明神絵詞」によれば、義仲との間には女子一人が生まれたという。

諏訪大社は平安末期にも大神社として全国に知られていた。御射山神事という武芸を競う神事があるほど弓馬の道が盛んだった。そのためか義仲に対しては早いうちから援助の手を伸ばしていたようで、室町時代の御伽草紙「唐系物語」にも諏訪と義仲の深い関係が描かれている。また金刺盛澄の弟・手塚光盛は義仲軍で重鎮として活躍し、義仲の最期五騎にまで残る奮戦を見せている。

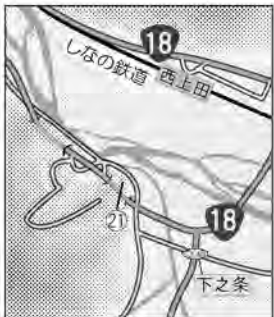
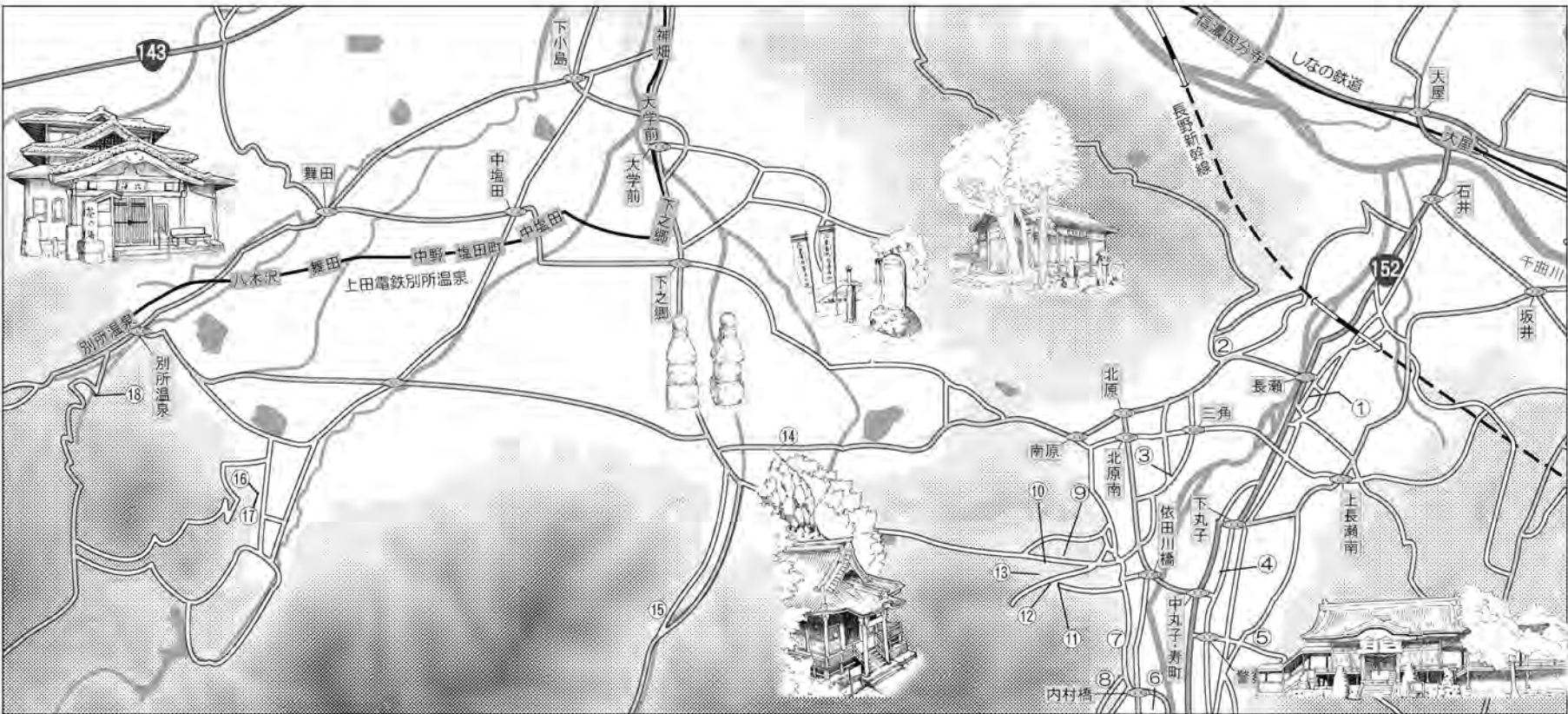
諏訪大社は頼朝にとっても気になる存在であり、義仲の生前から頼繁にコンタクトを取っていた。義仲の死後は御家人として取り立てられた。「武家の守り神」として全国の武士達から崇拜を集めるようになった。



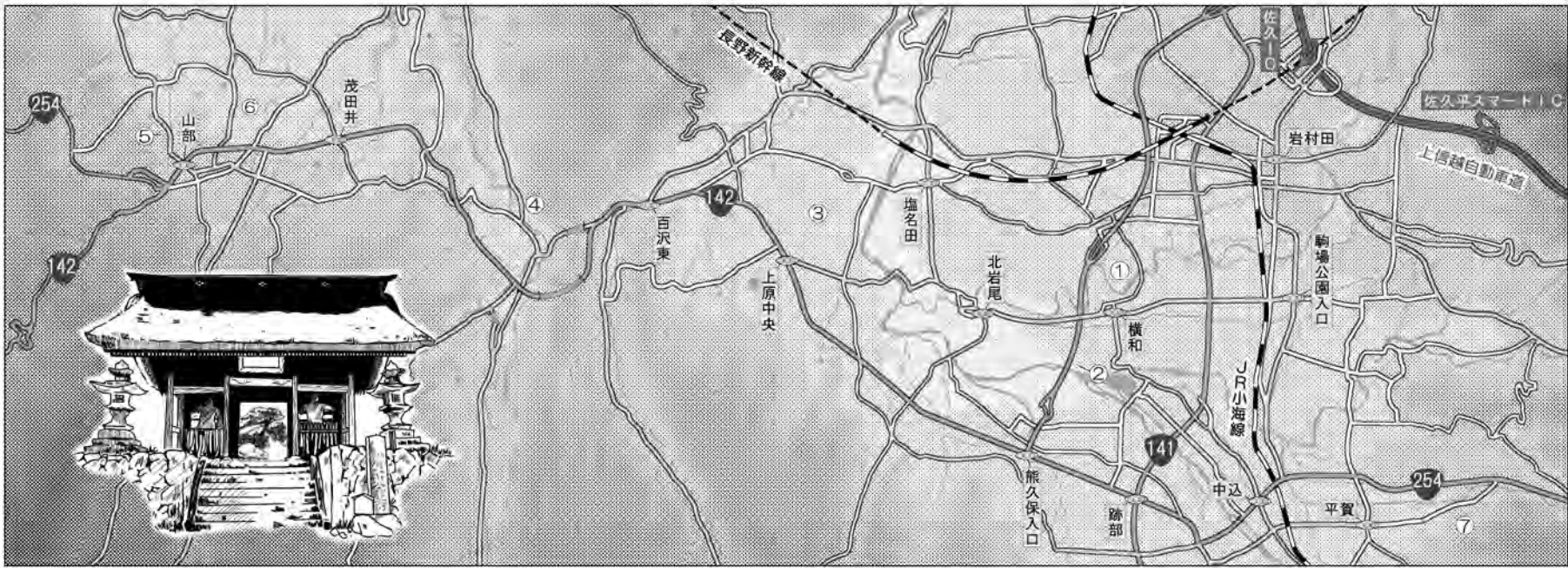
- ① 樋口城及び大石城
(宮木駅1.3km17分)
樋口兼光ゆかりの城。子孫が住んでいたが、後年大石城に移転したという。
- ② 樋口本拠地
(JR伊那新町1.9km25分)
樋口の館があった場所。
- ③ 木曾氏の砦
(JR宮木駅2.7km35分)
王の洞の山頂に城山と言った名が残る場所。寿永の頃義仲の砦だったという。
- ④ 毘沙門天
(JR宮木駅7.5km94分)
義仲の兜入毘沙門天を奉ったお堂があったことにより「堂平」という地名が残る。後に夏明に移転したという。
- ⑤ 駒の足跡石
(JR宮木駅9.8km124分)
義仲の馬の足跡が刻まれた石。
- ⑥ 瀬戸城
(JR宮木駅9.6km121分)
義仲の城と伝えられる城。岩尾山と瀬戸山1000mにわたって城跡が残る。
- ⑦ 一夜城
(JR信濃川島駅5.5km69分)
義仲の支城。
- ⑧ 朝日堂
(JR信濃川島駅6km76分)
瀬戸城から出土した義仲の守り本尊を奉るお堂。
- ⑨ 城見
(辰野町大字横川周辺)
義仲が城を立てようとしてここから場所を選定したという場所。
- ⑩ 駒王丸産神
(辰野町大字横川周辺)
かつて横川田中にあった社。義仲の産神を勧請した。
- ⑪ 陣場平
(辰野町大字横川周辺)
義仲の家臣が砦を構えたとする場所。
- ⑫ 山吹城
(JR下諏訪駅2.9km37分)
金刺氏に関わる山城。水上公園に続く山手にある。
- ⑬ 唐系と万寿姫
(JR下諏訪1.2km16分)
義仲の妻と唐系は鎌倉に潜り、義仲の頼朝を助けた。義仲の頼朝を助けた。義仲の頼朝を助けた。義仲の頼朝を助けた。
- ⑭ 桜城
(JR下諏訪駅1.5km19分)
金刺盛澄居館に付属する砦。諏訪神党の拠点の一つ。
- ⑮ 鎌倉街道口マンの道
(JR下諏訪駅0.9km12分)
鎌倉時代の伝説や物語、民間信仰などを結んだ観光遊歩道。
- ⑯ 諏訪大社下社
(JR下諏訪駅0.9km12分)
義仲とゆかりが深い神社。大祝・金刺盛澄は義仲を婿にした。軍事的宗教的に支援した。
- ⑰ 山王台
(JR下諏訪駅0.7km10分)
手塚光盛の居城。霞が城があった場所。現在は金刺盛澄の像がある。
- ⑱ 梶原塚
(JR下諏訪駅0.3km5分)
梶原景時ゆかりの塚。義仲亡き後、梶原景時の動きで御家人となつた諏訪神党は、景時が死後宝剣を埋め塚を作ったと伝承がある。
- ⑲ 旧御射山遺跡
(諏訪市大字四賀周辺)
諏訪大社の御射山神事行われた場所。現在の霧が峰山中の信濃郡武将が集った。山各地の武將が集った。山各地の武將が集った。山各地の武將が集った。
- ⑳ 御射山祭
(諏訪市大字四賀周辺)
諏訪大社の御射山神事行われた場所。現在の霧が峰山中の信濃郡武将が集った。山各地の武將が集った。山各地の武將が集った。

上田市

木曾義仲の居城・依田城がある。上田市丸子地域には信濃源氏の依田氏がおり、依田城を本拠地としていたが、義仲の勢力地である諏訪・松本・上田・群馬県西部を結ぶ中間地点にあたるため、長瀬氏を通じて義仲に依田城を譲ったと考えられている。また東信地方には望月牧をよりどころとする武士団・滋野党があり、棟梁にあたる海野氏の娘を義仲は妻にして、海野幸氏にまつわる伝承地も多い。

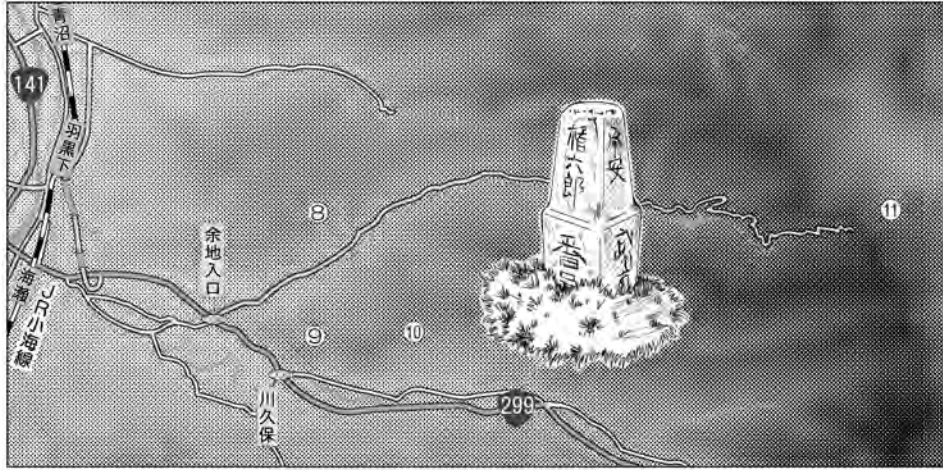


- ①長瀬氏本拠地
(しなの鉄道大屋駅 2・9 km 37分)
信濃源氏・長瀬氏の本拠地。
- ②飯沼氏本拠地
(大屋駅 3・4 km 44分)
義仲に従った武士飯沼氏の本拠地。
- ③愛宕神社
(大屋駅 4・6 km 58分)
海野幸氏ゆかりの神社。義高が鎌倉に送られる際、幸氏が流籠馬を奉じた三角にある。
- ④開戸城跡
(大屋駅 4・5 km 57分)
義仲ゆかりの城。
- ⑤長福寺
(大屋駅 5・5 km 70分)
大夫坊覚明ゆかりの寺。光の洞などの伝承がある。
- ⑥丸子城跡
(大屋駅 6・3 km 80分)
義高が鎌倉に送られる際、義的と矢が奉納されたという安良居神社がある。
- ⑦岩谷堂観音
(大屋駅 6・1 km 77分)
義仲が武運を祈った観音。義仲手植えの「義仲桜」、義仲が通った「馬大門」などの伝承が残る。
- ⑧お歯黒の池
(大屋駅 6・5 km 82分)
巴が池に顔を映して化粧した場所。
- ⑨正海清水
(上田電鉄下郷駅 6・4 km 81分)
清水義高ゆかりの清水。
- ⑩小鍋立の湯
(下郷駅 5・7 km 72分)
依田城に連なる麓にわいていた温泉。
- ⑪御岳神社
(下郷駅 6・4 km 85分)
義仲ゆかりの神社。
- ⑫依田城
(上田電鉄下郷駅 6・4 km 81分)
義仲の居城。近くに義仲館跡、依田氏館跡がある。尾根伝いに依田神社、御岳神社が残る。
- ⑬義仲館跡
(下郷駅 6・0 km 77分)
義仲の屋敷跡。
- ⑭巴・山吹の五輪塔
(下郷駅 2・9 km 37分)
巴と山吹の供養塔と呼ばれる五輪の塔。
- ⑮きつねの湯
(下郷駅 3・9 km 50分)
義仲の時代に隠し湯があったという伝承。
- ⑯手塚太郎五輪塔
(別所温泉駅 2・7 km 35分)
手塚太郎光盛の手塚はこの地にちなむとも言われ、五輪塔が残る。
- ⑰薬師像
(別所温泉駅 2・7 km 35分)
手塚光盛の守り本尊。光盛寺に奉られていたが、寺が廃寺となり、無量寺に移された。
- ⑱葵の湯
(別所温泉駅 0・5 km 7分)
義仲と葵が訪れたという伝承が残る温泉。
- ⑲荒神宮
(上田電鉄下郷駅 0・9 km 13分)
巴にまつわる神社。中原兼遠は今井兼平に義仲の荒神神像を託して木曾一門の武運を祈らせた。義仲敗死後に巴は尼となってここにきて暮らし、荒神宮を奉ったという。
- ⑳小牧城跡
(城下駅 2・3 km 30分)
義仲の山城。
- ㉑岩鼻
(上田電鉄上田原駅 3・8 km 41分)
横田河原合戦の戦跡。橋六郎が崖の頂上から長野まで見渡したという。

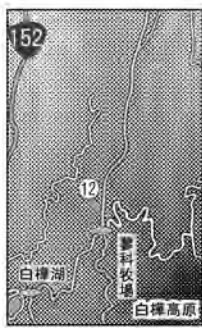


信濃の名族と言われる滋野党の一族が各地に館を構えていた。滋野党は望月牧を拠り所とする武士団で、海野氏を筆頭に、望月氏・祢津氏など佐久地方の武士達が同族意識のもと結びついていた。特に佐久市には保元の乱でも活躍し、義仲の挙兵時に中原兼遠から義仲の後見人として指名された武将・根井大弥太行親の本拠地がある。根井の六男・植親忠は上野国(群馬県)との峠の道筋に館を構えていた。また、佐久盆地には今井兼平、樋口兼光ゆかりと言われる城が残る。特に樋口兼光は上野国の武士団と血縁関係があることが知られており、木曾四天王が佐久地方を拠点とし勢揃いしていた時期があったことを伺わせる。

佐久市 立科町 佐久穂町 長和町



- ① 正法寺 (JR北中込駅2.5km290分) 根井行親の館跡。行親の妻が建立したといわれる行親供養塔がある。また鎌倉時代の初期と推定される奇木造りの地蔵菩薩像がある。
- ② 今井城 (JR北中込駅3.1km37分) 今井兼平の城。大きな五輪塔がある。後世、巨石を徳音寺に運んだという。
- ③ 望月牧 (JR中込駅9.6km113分) 都でも知られる名馬の産地。信濃にあった16の御牧の中でも、和歌にも登場するほど有名。東御市北御牧には野馬除けの土堤跡がある。
- ④ 望月城 (JR中込駅1.4km166分) 望月氏の居城。平安から戦国時代まで使用された。
- ⑤ 津金寺 (J)の鉄道田中駅 12km146分) 滋野一族ゆかりの寺。滋野氏宝塔と呼ばれる石造塔婆が三基ある。
- ⑥ 冠者社 (J)の鉄道田中駅 13km158分) 義仲を祭る社。滋野氏が祭ったものとみられている。
- ⑦ 平賀城 (JR太田部駅2.8km33分) 信濃源氏・平賀盛義の本城。
- ⑧ 蟻城 (JR八千穂駅約2km40分) 樋口兼光ゆかりという説もある城。諏訪・多胡に通じる交通の要地であり、山の地形を利用した複雑な城跡で、周辺に鎌倉時代の古い五輪塔などがある。
- ⑨ 樋六郎館跡 (JR海瀬駅3.3km60分) 樋六郎館跡。「館」という地名が残る。
- ⑩ 大涯城 (JR海瀬駅4.6km120分) 矢田義清の居城。義仲の父義賢が討たれた時、義仲は母に抱かれて十石峠を越えてこの城に落ちのびたという。この付近には御門前・ねごゆ・土族寝などの地名がある。
- ⑪ 余地峠 (JR海瀬駅8.5km170分) 佐久と群馬県を結ぶ峠。群馬県鉾川の溪谷を下り、江戸時代には群馬県吉井方面と相当多くの交通があった。吉井・藤岡付近の多胡庄は義仲の父の領地のため、この峠を通って幼い義仲が信州に逃れた可能性もある。
- ⑫ 与惣塚 (J)の鉄道田中駅 200m330分) 兼平の子・与三兼連の塚。兼連は義仲敗死後息子の義重が信濃に落ちのびたことを知り、あとを追っていた。しかし体が弱く戦に参加できないうえに、旅の苦勞が多かったため、家臣達は彼を葬り、たくさんの石を積み上げたという。



女性たち

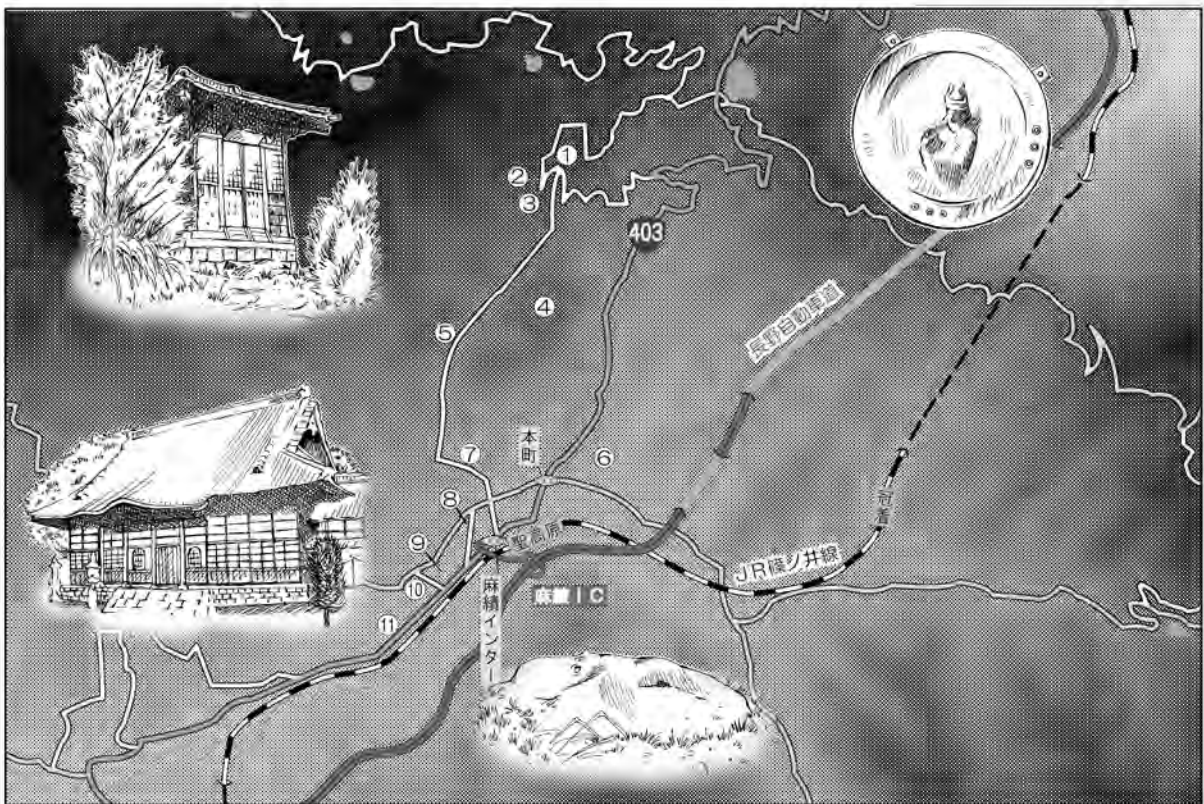
義仲には巴御前の他にも女武士が従っていたことが知られている。山吹・葵である。巴御前も含めこれらの女性達の存在は史料には残されておらず、出自・立場共に謎に満ちているが、伝承の中にその姿をとどめている。

巴については、中原兼遠の娘と伝えられ、長野県木曾町・松本市・上田市を中心に義仲と行動を共にする伝承が多く残っている。終末の地は富山県南砺市と言われ、現在巨木となった巴手植えの松が市街地に残されている。山吹については、海野氏の娘と伝えられ、清水義高の母ではないかと言われている。平家物語によれば、巴同様に女武将として都まで共にのほり、そこで身体を壊したとあるが、はっきりしたことがわからない。長野県の他、滋賀・愛媛・愛知・埼玉県に伝承があり、終焉の地もはっきりしない。葵については、栗田氏の娘と伝えられるが、あまり伝承はなく、女武者として俱利伽羅合戦に参加したが戦死したという。現在も葵塚が残っている。この他に、諏訪大社大祝・金刺盛澄の娘は義仲と一女をもうけたと諏訪大明神絵詞に記されており、おそらくその事実をモチーフとした「唐糸草紙」という室町時代の御伽草子が現在にも伝わっている。

義仲の時代には複数の女性を妻とするのが有力武将にとっては当たり前のことであり、各地の有力豪族と強固な関係を持ったために必要不可欠なことであった。義仲の妻が長野県の四つの盆地の出身者であることはその勢力の広がりとともに注目すべき点といえよう。

麻績村

平安末期に平正弘所領の麻績御厨があり、信濃平氏の一大拠点であった。保元の乱での敗北で、平正弘は所領を没収され、家人とみられる信濃平氏は北信の笠原氏に同調し麻績、会田、横田河原合戦で義仲と対立した。義仲に関する地名が多く残るがどれも戦にまつわるもののため「市原の戦い」は麻績村が舞台だったのでこの説がある。



①東遠見 (JRR聖高原駅6 km 76分)

義仲が物見の兵を出した所。

②西遠見 (JRR聖高原駅5 km 63分)

義仲が物見の兵を出した所。

③木曾殿城跡 (JRR聖高原駅4.4 km 56分)

横田河原合戦の際、陣した。

④のろし場 (JRR聖高原駅3.5 km 44分)

義仲の合戦に関わる地名。

⑤山吹堂 (JRR聖高原駅2.3 km 30分)

山吹ゆかり。

⑥市原合戦場跡 (JRR聖高原駅1.3 km 17分)

市原の合戦に関わるものと推定される。

⑦法善寺 (JRR聖高原駅1.1 km 14分)

義仲と樋口兼光にまつわる伝承が残る妙理観音を奉る。

⑧ガッター (JRR聖高原0.9 km 13分)

義仲の愛馬が疲れて膝をがったりとおったところ。

⑨ソリム (JRR聖高原駅1 km 14分)

連戦で疲弊した愛馬を故郷に帰す時、義仲が振り返って見送ったところ。

⑩駒が石 (JRR聖高原駅1.8 km 23分)

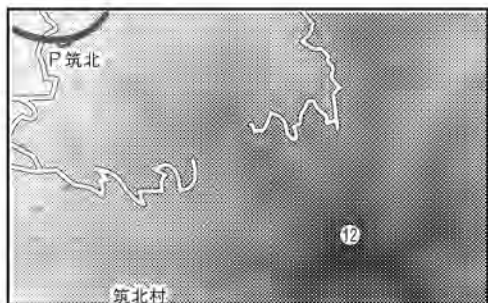
義仲の愛馬の蹄の跡が刻まれた石。

⑪一口坂 (JRR聖高原駅1.6 km 21分)

義仲の愛馬が急坂に疲れて立ち止まった。その時道端に生えていた笹を一口食べると元気を取り戻して歩き出したところ。

⑫四阿屋山

横田河原合戦の時、義仲が旅陣をひいていると四阿屋山の山頂が光り輝いた。家臣に命じて確かめさせると妙理観音が忽然と現れた。義仲は樋口兼光に命じて、観音を法善寺に奉らせ、軍の守護神として篤く祈った。横田河原合戦が勝利に終わると義仲は周辺を寺に寄進したという。





千曲市 長野市

横田河原合戦の舞台。伝承を辿ること実際の戦の様子が浮かび上がる。
今井兼平と大夫坊覚明ゆかりの寺社がこの地に残るのは大合戦の鎮魂のためだろうか。

- ① 武水別神社 (JR横捨駅2.9km 65分)
横田河原合戦に関する神社。横田河原合戦の前夜、先発隊だった橋六郎が武水別神社を見つけた参拝していたところ、義仲の本隊が追いつき共に祈りを捧げたという。現在でも義仲戦勝祭を七月十四・十五・十六日に行っている。
- ② 大雲寺 (JR横捨駅3.1km 37分)
横田河原合戦に関する寺。養和元年に義仲が祈願したと伝えられ、寺社地を寄進したとも言われている。
- ③ 桑原の義仲伝承 (JR横捨駅5km 59分)
横田河原合戦に関する伝承地。木曾殿陣場・かまとぎ・けいし水・さいの神という地名が残る。
- ④ 進軍伝承 (JR横捨駅5km 付近)
横田河原合戦に関する伝承。桑原村の南沢利右衛門が義仲軍の一隊が横手山を通って出陣する時道案内をしたというもの。
- ⑤ 長福寺文書 (J) なの鉄道屋代駅0.5km 5分)
横田河原合戦に関する寺。寿永二年に義仲が横手山に陣所を設け、佐野薬師に屯営した。そのとき焼失し廃院となってしまうたという。
- ⑥ 弁天塚 (J) なの鉄道屋代駅0.6km 7分)
横田河原合戦の戦跡。橋が兵500を持って潜んだ所。雨宮神社の東南にある。
- ⑦ 義仲鞍掛けの石 (JR稲荷山駅1.8km 23分)
横田河原合戦の戦跡。義仲が鞍を掛けたという石。
- ⑧ 舟つなぎ石 (JR稲荷山駅1.8km 23分)
横田河原合戦の戦跡。渡河地点だったという。
- ⑨ 横田城 (長野電鉄雨宮駅0.9km 12分)
横田河原合戦の戦跡。土塁が残存し、城氏の横田河原の本陣という。
- ⑩ 雨宮の渡し (長野電鉄雨宮駅0.5km 7分)
横田河原合戦の時に川を渡った場所。舟つなぎ石のある地が源平期には渡河地点だったという説もある。
- ⑪ 大尊社 (長野電鉄金井山駅2.6km 33分)
横田河原合戦に関わる社。戦火に巻き込まれたという。
- ⑫ 切勝寺 (JR今井駅0.7km 9分)
今井兼平の守本尊と伝えられる聖観音を安置する寺。
- ⑬ 今井神社 (JR今井駅0.7km 9分)
今井兼平の住居もしくは領有地という場所。馬洗いなどの地名がある。
- ⑭ 兼平五輪塔 (JR今井駅0.7km 9分)
今井神社の西にある五輪塔。
- ⑮ 康楽寺 ⑯ 義仲守り本尊 (JR稲荷山駅0.6km 9分)
大夫房覚明開基の寺。義仲ゆかりの阿弥陀仏がある。
- ⑰ 更級斗女神社 (JR今井駅1.9km 23分)
横田河原合戦の戦跡。義仲が城氏を追いはらい勝鬨を上げたという。勝鬨八幡社とも。近隣の常泉寺はこの時火事になった。

義仲の戦い 市原・横田河原

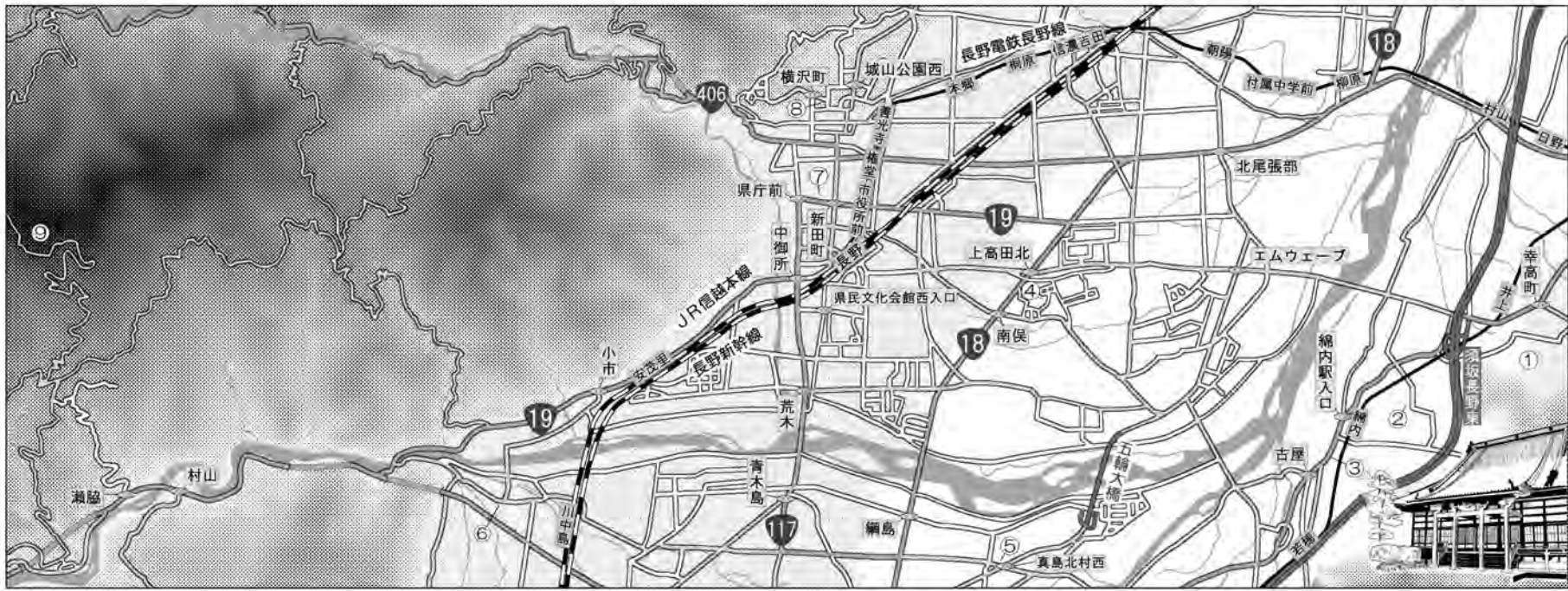
一一八〇年の春「以仁王の令旨」が義仲の元に届けられた。以仁王が平家の専横を嘆き、各地の源氏に決起を求めて発したものである。以仁王による都での戦は敗北に終わったものの、志は令旨と共に伝わり各地で国府を武士が急襲するなどの戦いが起こった。

義仲は「信濃を戦乱に陥れることになる」と考え早急な挙兵を行わなかったが、北信濃において、笠原氏と栗田氏を中心とした武士達の間で激しい合戦が起こり、援軍要請を受けた義仲はついに挙兵を決意し、笠原氏の軍勢を撃破した。これを市原の合戦といい、この勝利によってそれまで勢力外にあった北信濃の武士達も義仲の配下に加わった。

その後、義仲は内乱状態だった上野国(群馬県)の武士達の要請を受けて上野国府へ向かい、亡き父に仕えていた家臣たちを軍勢に加えた。

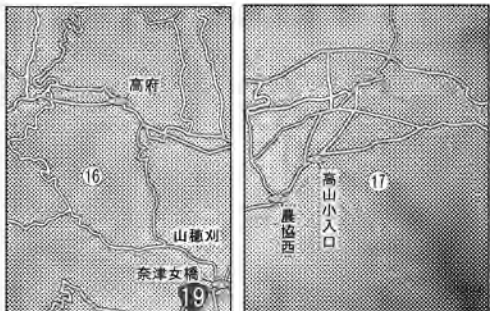
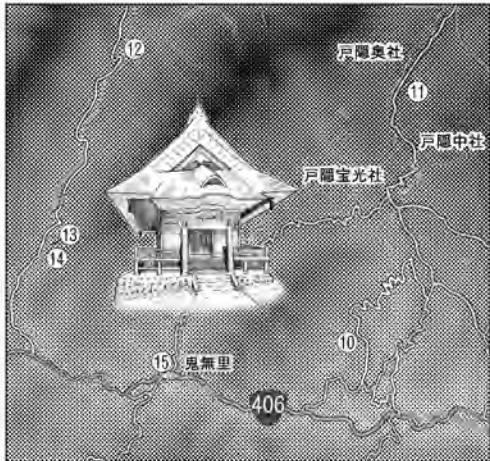
義仲の勢いが盛んになるのを聞いて、一一八一年都の平家は越後の城氏へ信濃に兵を送るよう命じた。六万の軍勢に対し、義仲軍は三千騎。義仲は、少ない軍勢をあえて分け、地元武士のみが知る地形を生かした作戦により、遠征で疲れ果てていた城氏を追い詰め、中でも信濃源氏井上氏の赤旗から白旗へ旗を持ち替える奇策に城氏がはまり、混乱したことが勝利の決定的なきっかけとなった。

これを横田河原合戦といい、義仲の名前が全国にとどろいた大合戦であった。



信濃源氏と信濃平氏の本拠地が入り乱れて存在し、争いが絶えなかった地域。一一七九年に善光寺が消失してしまつたのもそれらに關係していると考えられる。信濃源氏一派である栗田氏は善光寺別当を務めており、善光寺をよりのところとする武士団があつたが、中野市の信濃平氏・笠原氏の縁者も善光寺平に多く存在していた。笠原氏は越後平氏の後ろ盾を得て善光寺平の掌握を狙い、栗田氏らと合戦になった。敗戦濃厚となった栗田氏は義仲を頼り、義仲軍の救援を得て勝利を収めた。これを「市原合戦」というが、実際の合戦地がどこであるのかははっきりしていない。笠原氏は越後平氏城氏の元を下り、一一八一年に六万もの大軍勢で信濃に攻め込んだ。対する義仲は栗田氏ら地の利を知り尽くした武士達の助言を聞き、小勢で善戦を重ねる。なかでも須坂市に本拠地を持つ信濃源氏・井上氏の赤旗から白旗へ持ち替えるという奇策に敗れた。これを「横田河原合戦」といい、その戦地は後に「川中島の戦い」の舞台となった。義仲の死後は信州新町などの山間部に遺児が隠れ住んだという伝承があり、義仲の祐筆大夫坊覚明は寺を開いたのち亡くなつてはいる。

長野市 須坂市 高山村



- ① 井上氏本拠地
(長野電鉄井上駅1km12分)
信濃源氏井上氏の本拠地。城跡など一帯に多くの地名が残る。
- ② 前山城・春山城
(長野電鉄綿内駅 1.0km13分)
横田河原合戦に関わる戦跡。寿永元年九月築城と伝えられる。
- ③ 義仲院水口山称名寺
義仲と巴の子が開基だと伝えられている寺。
- ④ 清水冠者義高跡
(JR長野駅2.7km35分)
木曾殿屋敷とも伝えられる場所。
- ⑤ 元八幡社
(長野電鉄大室駅2km26分)
横田河原合戦の戦跡。義仲が祈願したとの伝えがある。
- ⑥ 小松原伊勢社
(JR川中島駅 2.0km30分)
義仲が参詣し、宮殿御造営のための棟札を奉納し、戦勝祈願を行った神社。
- ⑦ 源太塚
(長野電鉄市役所前駅 0.7km10分)
栗田寺別当寛寛の墓または義仲の父を討った悪源太義平の墓とも伝えられる塚。
- ⑧ 善光寺
(JR長野駅2km30分)
信濃屈指の寺。市原合戦の前年に焼失した。
- ⑨ 陣場平山
(長野市七二会周辺)
横田河原合戦に関わる地名。義仲の陣と思われる場所。
- ⑩ 福平城
(長野市戸隠橋原周辺)
横田河原合戦に関わる地名。今井兼平が陣したという。
- ⑪ 戸隠流
(長野市戸隠周辺)
義仲の家臣による忍術。仁科大助が義仲敗死後戸隠修験道に伊賀流忍術を加え戸隠流を完成させたという。
- ⑫ 木曾殿アブキ
(長野市鬼無里周辺)
木曾義仲の子孫が義仲敗死後落ち延びる際に、この岩穴に騎馬を休めたといわれる場所。
- ⑬ 文珠堂 (14) 朝日神社
(長野市鬼無里周辺)
義仲の文殊だと言うお堂。源氏落人伝説がある。文珠堂に登って更に行くといふ石段上に神社がある。
- ⑮ 松敵寺観音堂
(JR長野駅2.1km車47分)
義仲が北陸道へ行くお参拝し、持仏の文殊観音を安置したという寺。
- ⑯ 玉泉寺秋の旭観音
(信州新町越道周辺)
義仲が京都で信仰した観音。仁科軍の竹村兵部が持ち帰り寺を建てて奉ったという。
- ⑰ 木曾城
(JR須坂駅7.3km31分)
義仲の子・義基と母が従者十五人と住んだという地。

頼朝の信濃侵攻

～義仲と頼朝 対照的な二人～

横田河原合戦の後、越後に滞在していた義仲の元に北陸の武士達のはせ参じ、一度の勝利で、越前・加賀・能登・越中・越後・信濃に至る広範囲が義仲の支配下となった。その様子に平家以上に危機感を抱いたのは、源頼朝である。

源平合戦の初期は各地で挙兵した源氏それぞれが別の勢力として独立しており、棟梁・嫡流という存在がいなかった。関東を手中に収めていた頼朝は平治の乱で敗死した源義朝の嫡男だったことから「自分が源氏の唯一無二の嫡流である」と考えており、他の源氏に臣下の礼を取らせ、従わないものに戦をしかけていた。大軍勢を持つ義仲に対しては最後まで機会をうかがっていたが、一一八三年三月に義仲と頼朝の叔父にあたる源行家、志田義広が義仲の元に走ったことをきっかけに一〇万の兵を信濃へ差し向けた。

義仲は「源氏同士で戦うのは平氏に利益をもたらすだけで世の中のためにならない」と考え、信濃から越後に軍勢を引いた。それに対し頼朝は善光寺平まで進軍したが、そこで義仲の作戦に気づいた。横田河原合戦において越後から攻め入った城氏は義仲より一〇倍もの兵を持ちながらも、信濃の地を知り尽くした義仲軍勢に善光寺平であっけない敗北を喫していた。つまり義仲は背中を見せて逃げたのではなく、自分たちを信濃の奥地まで引き込んだ可能性が強いと考えたのである。頼朝は急ぎ使者を送り「叔父の行家と義広が鎌倉に渡せ。不可能であるならば息子の清水義高を鎌倉へ送れ。」と義仲に交渉をもちかけた。

過大な戦火に国をさらさない、同族間の争いを避ける、それが義仲の信念である。義仲は自ら決断を下す前に家臣を集めて議論させた。叔父二人を鎌倉に送ることは二人が殺されることを意味する。同族の血を流すことは避けたい。ではどうするべきかと。根井と小室光兼は争いを避けるために人質を鎌倉に送ることを主張し、今井はいずれ頼朝とは雌雄を決する時期が来るから今ここで戦うべきだと述べた。義仲は根井と小室の意見を採用「私の息子であれば頼朝もうかつに命を奪うようなことはないはずだ。」と、清水義高を鎌倉に送ることを決意した。頼朝は義仲の判断に驚き、後に叔父二人が足かせになることを予期しつつ兵を引いたのだった。

信濃の武士たちは、わが子を犠牲にして戦を避けた義仲の姿に深い感銘を受け、最後まで従うことを心に誓った。こうして頼朝と義仲の直接対決は避けられたが、義仲の敗死により歴史解説書などではこのエピソードが頼朝からの視点のみで一方的に語られているのが残念である。

中野市 飯山市 野沢温泉町 栄村

⑤野沢城館跡
(JR上埴駅2・7km33分)
険阻な城跡。木曾殿館跡という。

⑥義仲館跡
(JR上埴駅1.6km車44分)
巢鷹山頂上にある館跡。残濠がある。

⑦矢当たりの石
(JR上埴駅0・9km10分)
兼平が射た矢が当たったという石。

⑧合戦場
(JR飯山駅3.3km車76分)
義仲の北国進軍にまつわる地名。城氏軍を追って戦ったのが、合戦場という。

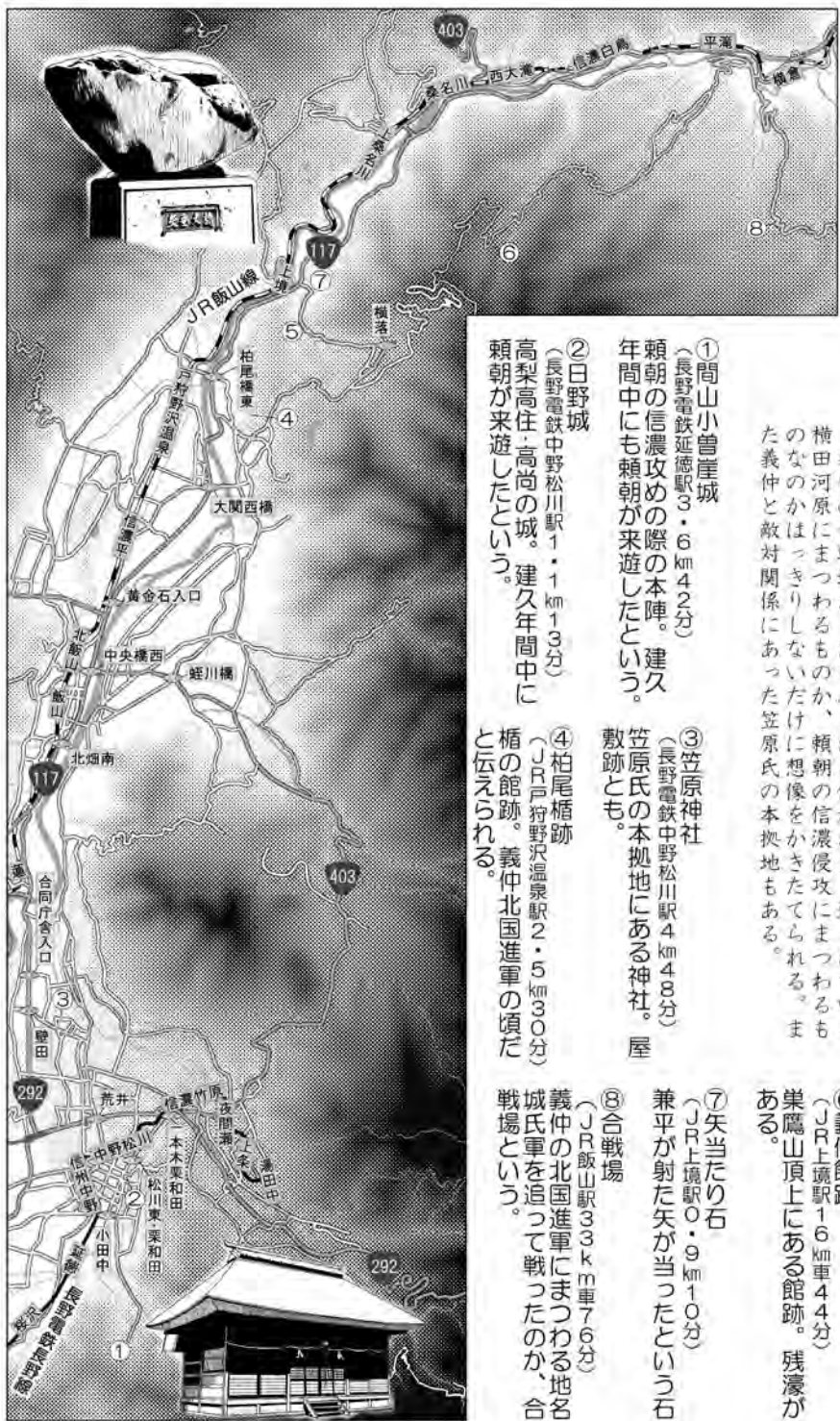
③笠原神社
(長野電鉄中野松川駅4km48分)
笠原氏の本拠地にある神社。屋敷跡とも。

④柏尾橋跡
(JR戸狩野沢温泉駅2・5km30分)
橋の館跡。義仲北国進軍の頃たと伝えられる。

義仲の合戦地だったとみられる伝承が多く残されている。横田河原にまつわるものか、頼朝の信濃侵攻にまつわるものなのかははっきりしないだけに想像をかきたてられる。また義仲と敵対関係にあった笠原氏の本拠地もある。

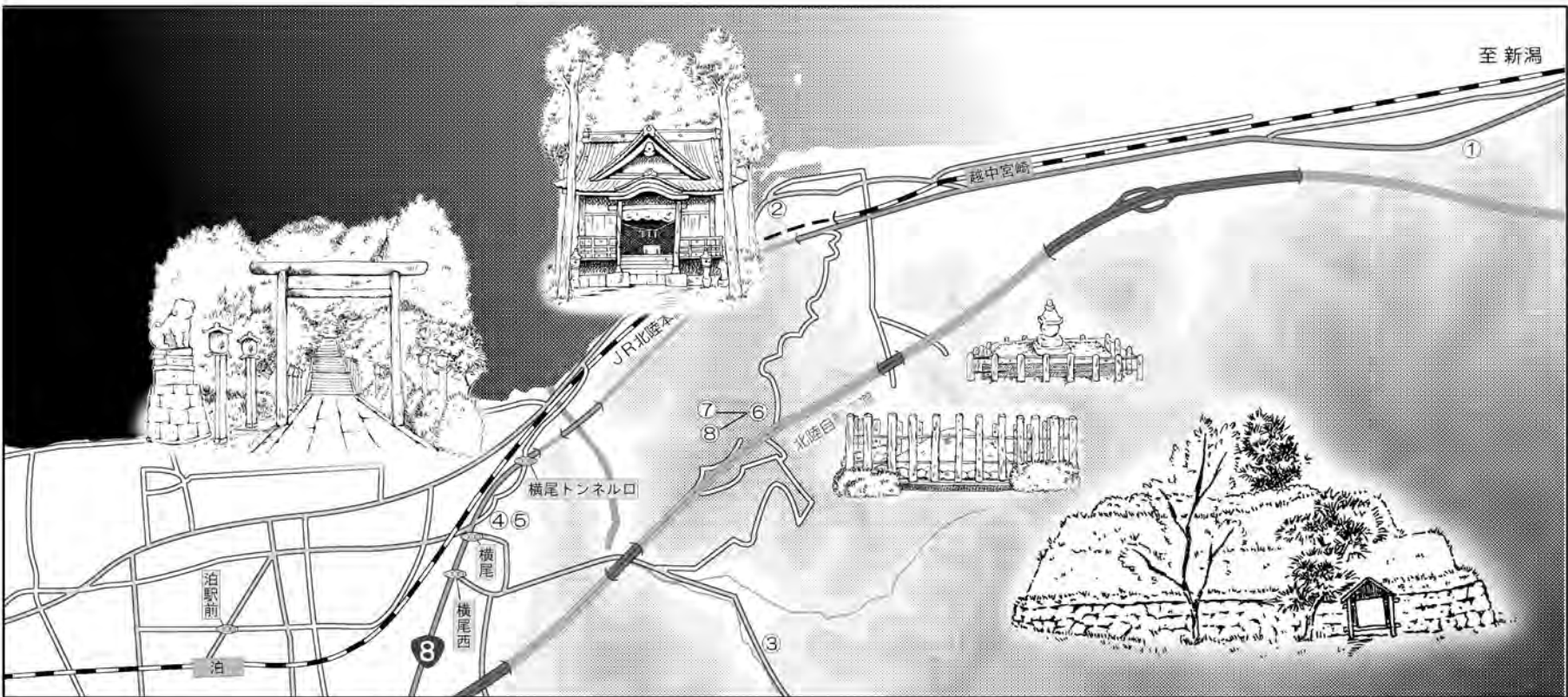
①間山小曾崖城
(長野電鉄延徳駅3・6km42分)
頼朝の信濃攻めの際の本陣。建久年間中にも頼朝が来遊したという。

②日野城
(長野電鉄中野松川駅1・1km13分)
高梨高住、高尚の城。建久年間中に頼朝が来遊したという。



朝日町

古代朝日町には律令の駅・佐味駅が置かれ、周辺には早くから莊園が開かれており、港は良港であった。義仲の軍勢に加わり北陸で活躍した宮崎氏のような越中を代表する武士団を育てたのもうなすける。また北陸宮が宮崎氏に保護され、朝日町に滞在していた。天然の要害である宮崎城はその後も重要な軍事拠点であり続けた。



- ① 虎尾桜
(JR越中宮崎駅2.5km34分)
義仲の妻・山吹の戒名を虎尾御前といい、木曾への帰りに植えたと伝えられる。金剛谷、境内内関所跡の南側山腹にある桜。
- ② 鹿嶋神社
(JR越中宮崎駅1.2km16分)
義仲が供物をささげたという神社。
- ③ 諏訪神社
(JR越中宮崎駅3.1km50分)
義仲が北陸宮を平家に奪われぬように擁護する為に建てたとされる神社。
- ④ 室町街道
(JR泊駅2.3km29分)
義仲が平家打倒の為に出陣した時におとつた道。脇子八幡宮の境内にあり、本殿への階段を横切るように南北に残っている。
- ⑤ 脇子八幡宮
(JR泊駅2.3km29分)
義仲が戦勝を祈願したとき

れる神社。北陸宮が元服をしたとも。宮崎城跡に奥宮があり、麓に里宮がある。

- ⑥ 宮崎城跡
(JR越中宮崎駅3km50分)
以仁王の第一王子北陸宮の御所として、宮崎太郎長康が築城。戦国末期には上杉方、佐々方方の武将も居城したという泉内最古の山城。三の丸には北陸宮墳墓、宮崎太郎長康の供養塔がある。
- ⑦ 宮崎太郎長康の供養塔
(JR越中宮崎駅3km50分)
北陸宮墳墓を擁護するように建てられた供養塔。昭和四十八年に長野県下伊那郡阿智村の宮崎太郎長康公墓碑と同一のものを建立した。
- ⑧ 北陸宮墳墓
(JR越中宮崎駅3km50分)
北陸宮を偲び京都市知恩院の奥にあたる安井宮墓地から分骨し鎮められた墳墓。昭和四十五年建立。七月八日が命日。

北陸宮と

義仲に従った北陸の武士団

一一八二年以仁王の子・北陸宮が都から落ち延びてきたため義仲は越中の武士・宮崎長康に保護を命じた。宮崎氏は古代豪族の流れをくむ武士で、平安時代末期に莊園が越中に多く開かれたとき、莊園として力を蓄えていた。宮崎の本拠地は北陸道で越後との境にあり、宮崎城からは越中の広い平野部が見通せ、海岸部には港が開かれ、ヒスイの交易で栄えていた。しかも三方を山に囲まれた平地があり、義仲は宮を隠しおくには最もふさわしいと考えたのである。また宮崎の佐美荘は八条女院領で、八条女院領と関係が深かった義仲は、挙兵する以前から宮崎と旧知の仲だったとも言われている。

義仲のもとには越中の宮崎・石黒、加賀の林・富樫、越前の平泉寺斉明、能登の得田・土田を中心とする諸国の武士団が北陸から集まった。信濃と異なり、北陸諸国は平家の支配下に直接おかれ、都から搾取される苦しみは大きく、そのため能登では、義仲の挙兵を受けて得田氏らが独自に平家の官人がいた能登国府を襲っている。義仲はその行動に対して、所領を安堵する文書を発給して庇護を保証した。越中の藤原助広(石黒党)への安堵状など現在まで残っているものは数通だが、義仲が所領を保証することで北陸の武士達と深く主従関係を結んでいった様子がわかる。

黒部市 魚津市 上市町

海沿いには義仲と緑の深い斎藤実盛の子が開基したという寺がある。山間部には義仲の進軍ルートが残る。

①浄永寺

(富山地方鉄道電鉄黒部駅

1.0 km (25分)

斎藤実盛の孫が開基したという寺。

②吉田氏本拠地

(JR生地駅0.7 km (10分)

義仲軍勢に従った吉田氏の本拠地。

③願楽寺

(JR生地駅2.3 km (30分)

斎藤実盛の孫が開基したという寺。

④木曾ヶ平砦

木曾屋敷と唱えて義仲軍が一時期

潜んだと伝えられている城跡。

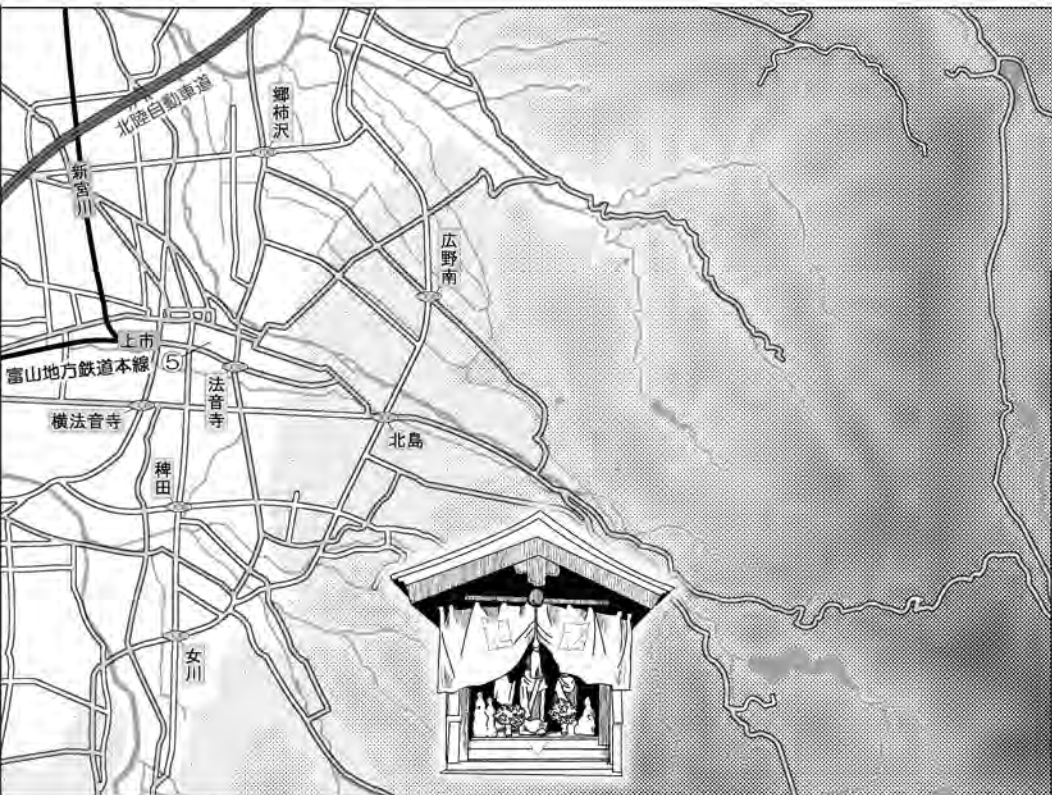
⑤地藏堂

(富山地方鉄道上市駅0.5 km (6分)

義仲軍が進軍の際、休息した地藏

堂。義仲が堂内の石に腰かけたこと

伝えられている。



北陸と義仲

義仲は越後国府に身を置き、北陸諸将にそれぞれの国を任せた。平家への防備を固めるべく越中では宮崎・石黒が宮崎・木曾ヶ平・呉羽に、加賀では林・富樫が高尾・根上・安宅・篠原に、越前には平泉寺・奇明らにより長畝・燧に城が築かれた。特に北陸の入口にあたる燧ヶ城には川をせき止めた人造湖が作られ、一一八三年四月一〇万に及ぶ平家の大軍の足止めに成功した。しかし北陸諸将が作戦の成功に喜ぶ中、平泉寺・奇明は自らの保身のため平家の元に走り、湖は壊され、燧ヶ城は攻め落とされ形勢は一気に逆転することとなった。北陸諸将は城から城へ転戦したが、数に勝る平家に敗北を重ねた。

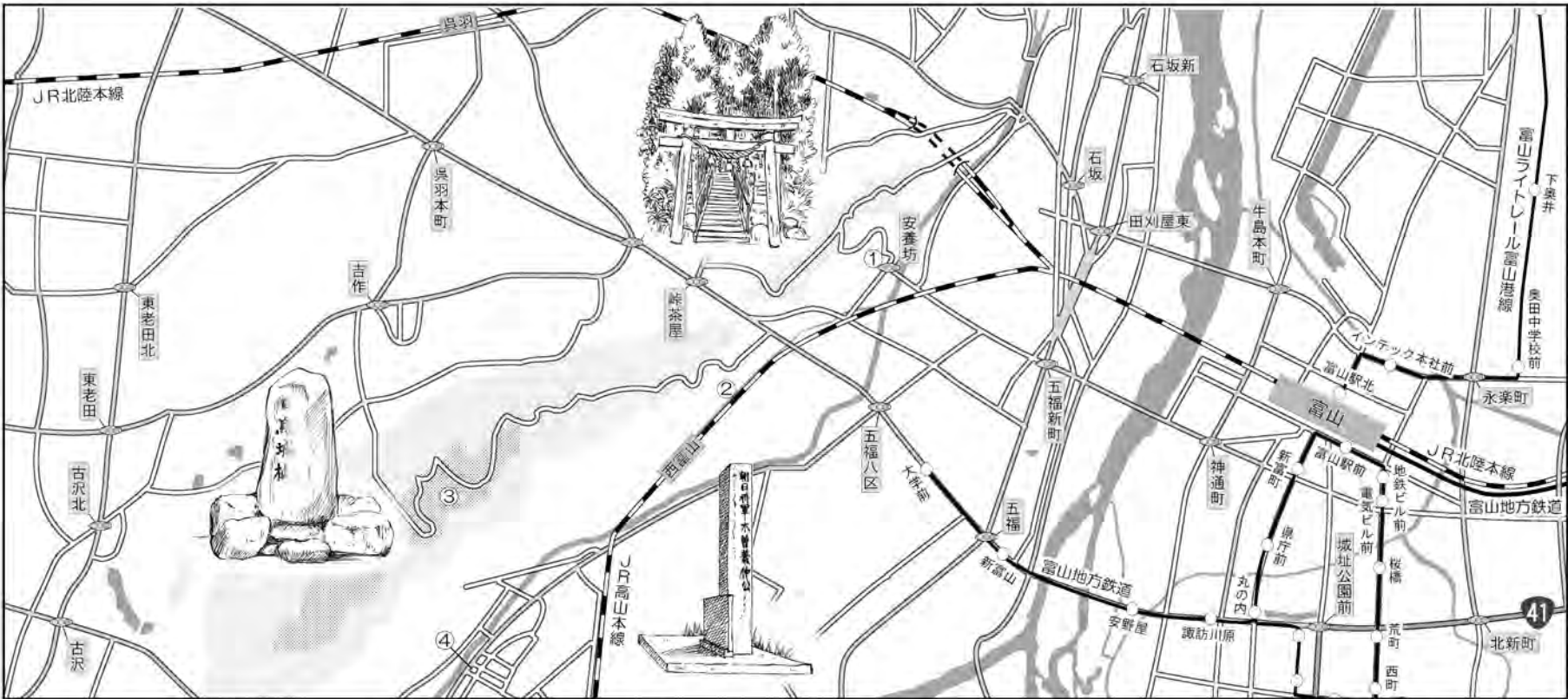
梯川の河口・安宅では、北陸諸将と平家による川を挟んだ大合戦が行われ、越中の宮崎と石黒は瀕死の大けがを負い、二人を越中に逃がすため加賀の井家が楯となって戦死した。林・富樫は義仲の援軍が越後国府から越中に辿り着くまでの時間を稼ぐため、さらに転戦を重ねたものの、最後の砦である高尾城を再び奇明の策により攻め落とされ、北陸道は加賀まで平家に奪われた。

義仲は北陸諸将の苦戦を聞き、今井兼平を先鋒として越中に向かわせた。今井は山沿いに越中を駆け抜け、呉羽山に陣を取り、すでに俱利伽羅峠を超えて越中に侵入していた平家の先兵を加賀に押し戻した。そのころ義仲の軍勢は海沿いのルートで越中国府に到着し、道々で従軍して来たものも含め五万の軍勢を整えて、白山権現に戦勝を祈願してから今井が待つ般若野に向かったのだった。



富山市

義仲軍の先鋒・今井兼平率いる軍勢が進軍したルートが残る。特に呉羽山付近には今井兼平が陣を張り戦勝祈願をした足跡が残されている。源平合戦当時は有力な武士団は県の西端（石黒氏）と東端（宮崎氏）に存在し、富山市出身の武士の名は義仲軍勢に見られない。



- ①安養坊八幡社
(富山地方鉄道大学前駅 1.4 km 18分)
- ②馬渡川
(JR西富山駅0.8 km 10分)
- ③白鳥城跡
(JR西富山駅2.3 km 29分)
- ④金屋西野館跡
(JR西富山駅1.8 km 23分)
- ⑤反杉
(富山空港1.6 km 21分)
- ⑥成子の由来
(JR東八尾駅3.5 km 44分)
- ⑦上大浦神社
(富山地方鉄道大庄駅 1.6 km 20分)
- ⑧真成寺
(富山地方鉄道大庄駅 1.8 km 23分)

富山県の 義仲伝承の 特徴

木曾義仲にまつわる伝承は、各県、全国にあるが、富山県の伝承で特徴的なことは、義仲にまつわる地名の多さである。特に俱利伽羅合戦に向かう軍勢の足取りを表現した地名が目立つ。

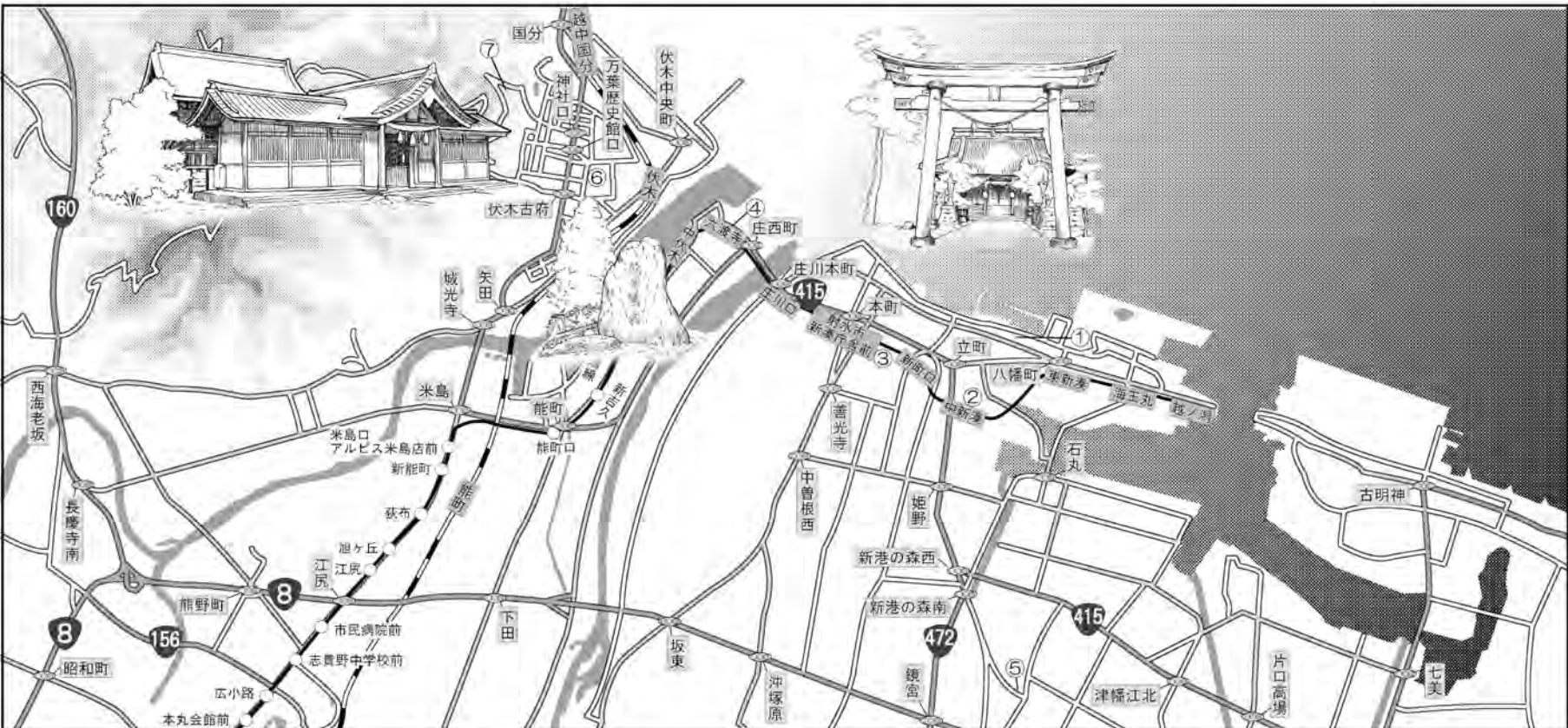
富山市の馬渡川、成子、砺波市の午飯岡、安川、高岡市の六渡寺、氷見市の鞍川、一列などである。またそれに伴い、ほほえましい伝承も残っているのが面白い。

これらの地を地図に落とし眺めて見れば、進んでいく軍勢の姿がより具体的に、身近なものとして感じられることだろう。

義仲史跡の「点」である場所それぞれを地図に現れた伝承地を実際に訪ねて、「線」としてつないだ時、また新たな発見にロマンをかきたてられるかもしれない。

高岡市 射水市

対立までの義仲の動向は史料でも確認できないため北陸諸国を訪ね越中に滞在していたかもしれない。一般野は平家との合戦の主戦場の一つとなっており、俱利伽羅合戦の進軍時に関わるものが数多くみられる。伝承としてはほほえましいエピソードを含むものが伝えられているのは越中武士団の中核を占める石黒氏とその一族の所領が後世まで残り、義仲を偲ぶものが多かったからではないだろうか。



越中国府が現在の高岡市にあり、義仲が掌握していた可能性がある。その様子は平家物語などには書かれていないが、義仲が発給したとして歴史的に認められている古文書の内容が越中の荘園に関わるもので、国府の関与が考えられるからである。横田河原合戦の後、頼朝との



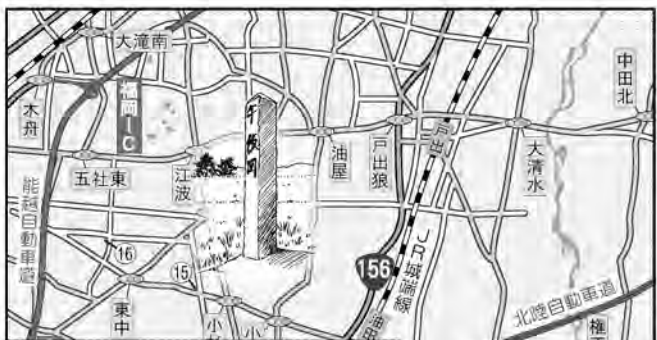
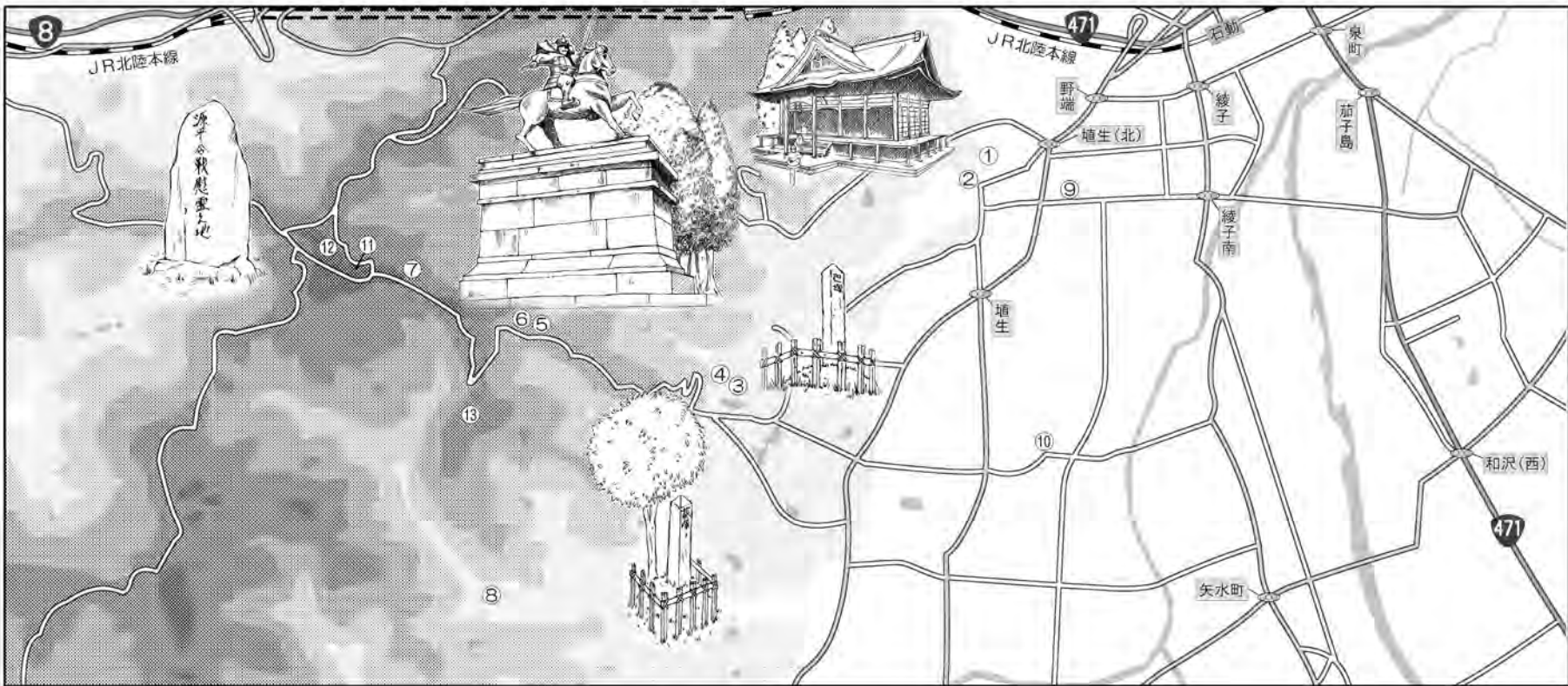
- ①放生津八幡宮
(万葉線東新湊駅0.7km9分)
興化寺の近くにあり義仲との関わりが推定される神社。
- ②放生津城跡
(万葉線中新湊駅0.8km100分)
五万余の義仲軍が進軍したとされる場所。
- ③興化寺跡
(万葉線新田口駅0.5km7分)
義仲が中興の祖という寺跡。
- ④六渡寺
(万葉線六渡駅0.5km7分)
義仲軍が駐在した地。
- ⑤道神社
(万葉線中新湊駅)
射水郡の峠神である神社。
- ⑥越中国府跡
(JR伏木駅1km13分)
一一八三年、義仲が礪波山の進撃に備え軍を整えた地。
- ⑦気多神社
(JR越中国分駅1.7km22分)
寿永年間(一一八二〜一一八四年)の末期、義仲の兵火によって伽藍や社殿が焼失したとの伝承がある神社。
- ⑧蓮花寺
(JR越中大門駅1.9km24分)
頼朝ゆかりの観音、石塔などがある寺院。
- ⑨石の清水
(JR伏木駅5.2km99分)
越中の山街道を進軍中の兵士達がしきりにどの濁きを訴えたため、義仲が水を求めてこの地に矢を放ったところ、矢のささった所から清水が湧き出たという伝説がある名所。現在も水が湧き出し(平成の名水百選)義仲の銅像が立つ。



- ⑩般若野
(JR伏木駅5.2km66分)
一一八三年義仲の礪波山への進撃に先立って源平両軍の先鋒が戦った地。
- ⑪駒繫ぎの松
(JR伏木駅0.4km6分)
一一八三年五月十一日般若野から俱利伽羅峠へ進軍途中の義仲がこの松の下で休み馬を繫いだといわれている地。現在、松の木はなくなっている。伝説を伝える石碑がある。
- ⑫向田氏本拠地
(JR福岡駅2.2km28分)
義仲軍勢に加わった石黒党の一員向田氏の本拠地。
- ⑬木舟城
(JR福岡駅3.2km40分)
木曾義仲に活躍した越中国の武士・石黒光弘が一一八四年に築き、以後石黒氏が治めたという城跡。

小矢部市 砺波市

小矢部市は俱利伽羅合戦の舞台となったことであまりにも有名。戦跡が狭い地域に密集している。砺波市には戦に到る義仲軍勢の足取りがほのぼのとした伝承と共に残されている。この付近は源氏とゆかりの石清水八幡宮（京都府）の荘園となっていた。埴生護国八幡宮には義仲が覚明に書かせて奉納した願文が残り、現在も義仲にまつわる神事が執り行われている。



① 埴生護国八幡宮
(JR石動駅1.8km22分)
義仲が俱利伽羅合戦の前に戦勝祈願をした神社。境内には日本最大級の義仲騎馬像がある。

② 俱利伽羅源平の郷埴生口
(JR石動駅1.7km22分)
俱利伽羅合戦の様子や武将達が紹介されている展示・情報施設。

③ 巴塚
(JR石動駅3.7km47分)
巴が福光で没した後、石黒太郎が、葵の戦死したところという場所に塚が残る。

④ 葵塚
(JR石動駅3.7km47分)
葵が俱利伽羅合戦で討死したため、義仲がこの地に埋めて塚を築いたという場所。

⑤ 矢立
(JR石動駅5.2km66分)
今井兼平が小競り合いで時間を稼いだ場所。平家軍の矢が数多く刺さったことから矢立とつけられた地名。

⑥ 塔の橋
(JR石動駅5.6km75分)
平家軍の最前線が今井兼平軍に矢を放った場所。

⑦ 猿ヶ馬場
(JR俱利伽羅駅3.8km50分)
平家軍の本陣があった場所。火牛の像、軍議石、源平供養塔などがある。

⑧ 膿川
(JR石動駅5.7km75分)
平家軍の屍から流れ出した血や膿が川となり後に膿川と呼ばれるようになった地名。

⑨ 聾乃口碑
(JR石動駅1.4km18分)
牛の角に松明を結び平家軍に夜襲をかける時に、聾の声を上げた場所。

⑩ 日宮林碑
(JR石動駅2.8km35分)
今井兼平が陣取り、源氏の白旗を立て平家軍の進軍を止めた場所。

⑪ 源平供養塔
(JR俱利伽羅駅3.7km48分)
俱利伽羅合戦における源平両軍戦死者を弔うため、昭和四十九年に建立された塔。西に加賀平野、東に砺波平野が眺望できる。

⑫ 五社権現
(JR俱利伽羅駅3.6km46分)
富山・石川の県境にある国見山（標高277m）の山頂付近には日本三不動尊寺がある。

⑬ 源氏ヶ峰
(JR石動駅0.2km35分)
俱利伽羅合戦の古戦場。地獄谷に面した急斜面が火牛の計の舞台。

⑭ 安川の由来
(JR砺波駅5.8km75分)
義仲が上洛の時この土地に住む者に庄川の瀬を案内しともらったところやすやすと川を渡れた事による地名。

⑮ 午飯岡の碑
(JR砺波駅3.2km41分)
義仲軍が般若野から俱利伽羅へ進軍中に昼食をとった場所。石碑がある。

⑯ 川田八幡宮
(JR砺波駅5.1km65分)
義仲軍が般若野から俱利伽羅へ進軍中に戦勝を祈願したという神社。

①氷見湊(湊川)
(JR氷見駅0・6km7分)
義仲が志雄山の平家軍追討の時渡ったとされる川。水の深さを調べため鞍置き馬十頭を追い入れたことに由来するとされる地名も残る。

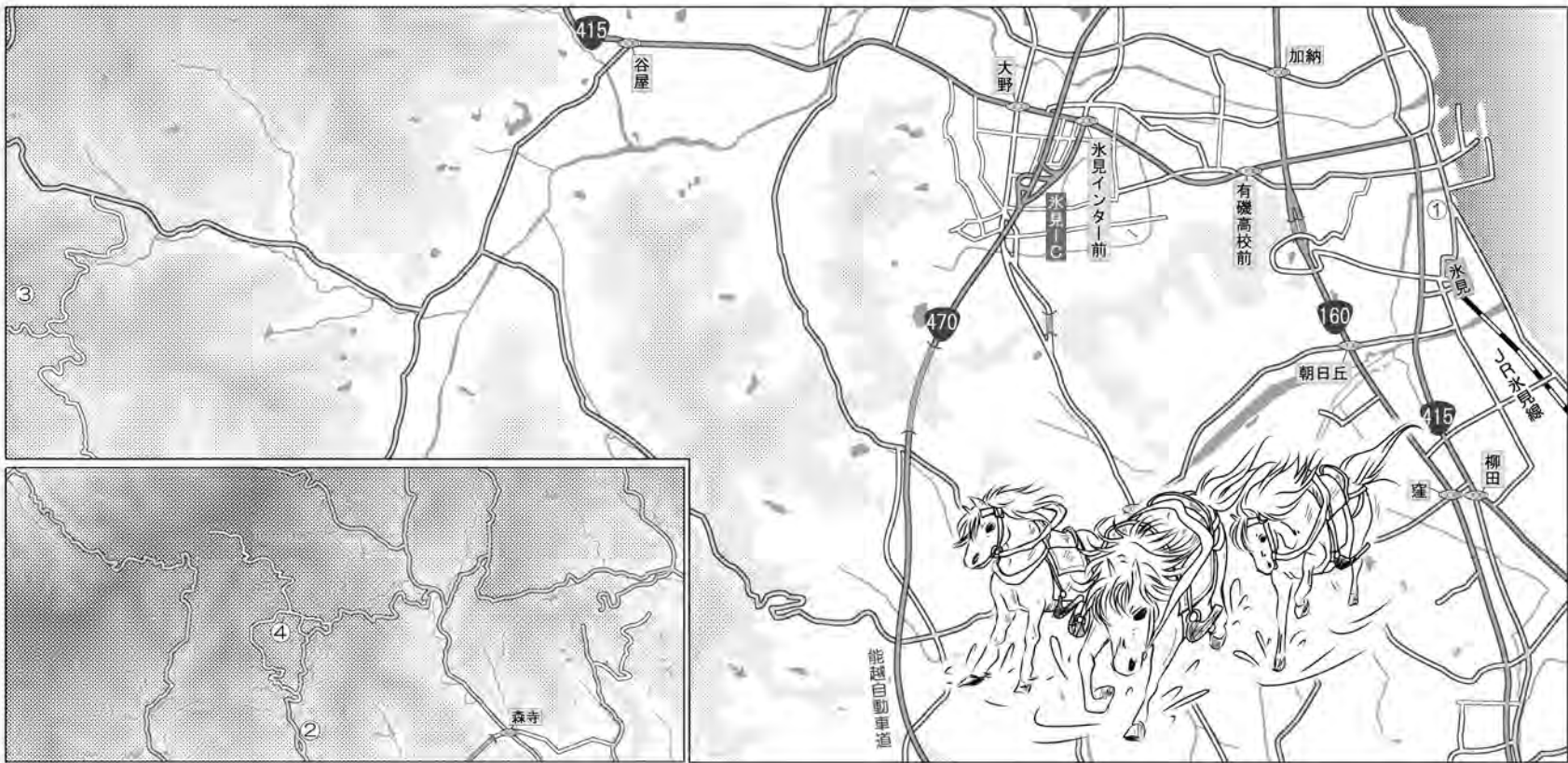
②義仲道
(JR氷見駅14・7km187分)
俱利伽羅合戦の後、苦戦していた叔父の行家軍救援のため義仲が進軍した道。

③白ヶ峰
(JR敷浪駅14km182分)
重要な古道。源平合戦の際も通ったとされる。

④一羽の由来
(JR能登部駅15・9km203分)
義仲の放った白羽の矢が落ちた所から一羽と呼ばれていたのが一羽となったという地名。

氷見市

俱利伽羅合戦の際、志雄山を越えて越中入りしようとした平氏を迎え撃った。



俱利伽羅合戦

般若野で今井と合流した義仲の元に、安宅で瀕死の重傷を負い越中に逃れていた宮崎・石黒ら北陸諸将も馳せ参じた。その姿に義仲は感激し、俱利伽羅峠の合戦について意見を求めた。宮崎・石黒は平家をおびき寄せて崖から谷へ追い落とすため複数のルートを示し、さらに加賀の林・富樫は、平家の逆走を防ぐため、俱利伽羅の山々を迂回して加賀に戻ることを申し出て、夜間に越中側と加賀側から平家を挟撃する作戦が決定した。

義仲は軍勢を七手に分け北陸諸将や石黒党を木曾四天王や巴と組にして平家に気づかれないように俱利伽羅谷目指して進軍させ、さらに志雄山から越中へ入ろうとしていた平家の分隊を抑えるため、能登の土田を先導に叔父の行家を向かわせた。そして義仲本隊は平家と正面からぶつかるために北陸道に向かった。進軍のさなか義仲は植生八幡宮に願文を捧げ、自分の利益のためではなく、国や人々を思う気持ちから戦いに臨む決意を新たにしたのであった。

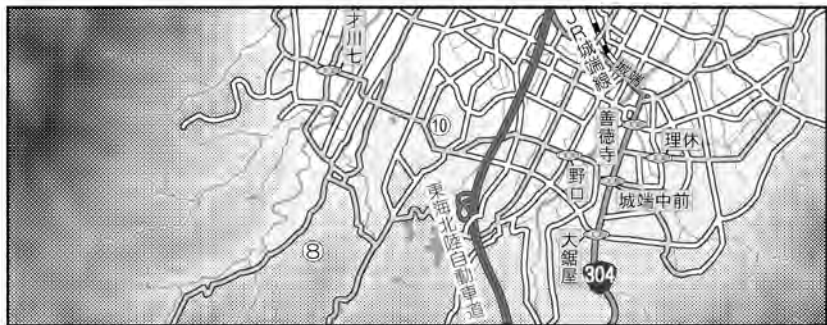
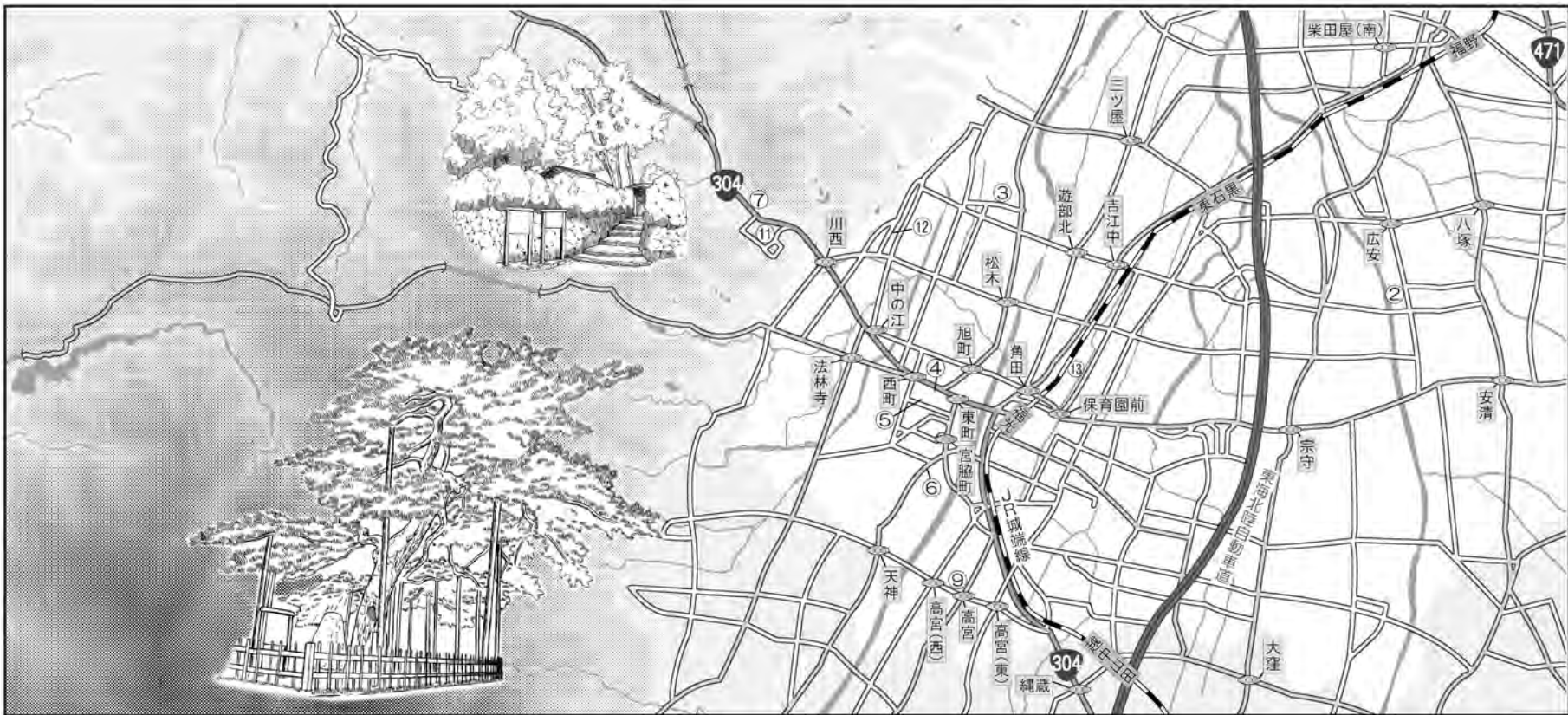
五月十一日、義仲が率いる本隊は平家と正面から対峙し、弓を射かけたり引いたり繰り返して峠から越えさせず、加賀方面に押しすぎませず、夜間に俱利伽羅の山中に留めることに成功した。搦手の樋口・林・富樫らも北陸道の加賀側にたどり着き、夜を待つばかりとなった。平家が義仲の作戦に気づかないまま、夜が更けた頃作戦が実行された。義仲の軍勢は山々の間から声を上げ、足音を踏み鳴らし、三方から山々にこだまする大音声におののく平家の陣に、角に松明をつけた牛の大群を猛スピードで駆けこませたのである。

平家は慌てふためいて四方八方に走り深い谷に落ち、北陸道を加賀へ戻ろうと逆走した者は加賀武士と樋口らの軍勢に射掛けられ逃げ場を失った。こうして義仲の軍勢は勝利を収めたものの、混戦の中小室光兼が負傷し、岡田親義や葵御前が命を落とし、戦の無常さ、残酷さも伝え残されている。

南砺市

義仲の妻巴御前が晩年を過ごしたといわれるのが南砺市である。南砺市は北陸諸将の中でも重要人物の一人・石黒光弘とその武士団・石黒党の本拠地だった。苗字の地を領地とする武士が多く存在している。石黒党は倶利伽羅合戦で義仲軍勢の先導役を務め活躍した。市内には牛にまつわる伝承が多く残る。

平安時代の人口は山が開けた盆地や扇状地に多く、南砺市周辺は理想的な地形に恵まれ、越中、飛騨、加賀との交通の要衝でもあった。特に高瀬庄（福野・井波）、石黒庄（福光）は荘園として有名で、八条院領だったという。特に高瀬庄は八条院領随一とも言われるほどで、石黒党の発達と深い関係があったと推定される。また小矢部川水系の奥峰は源氏ヶ峰、打尾川水系の奥峰は平家ヶ峰と言われている。



- ① 野尻氏本拠地
(JRR高儀駅2.2km28分)
古代から開けていたところ。石黒党野尻氏の本拠地。
- ② 広安の由来(平田神社)
(JR東石黒駅2.6km33分)
加賀右衛門広安にちなんだ地名。広安は義仲の末子義基といわれている。
- ③ 泉氏本拠地
(JR東石黒駅2.7km34分)
石黒党・泉三郎の本拠地と推定される地域。
- ④ 福満氏本拠地
(JR福光駅0.8km11分)
石黒光弘の舎弟・福満五郎の本拠地と推定される地域。
- ⑤ 福光城址・榎園
(JR福光駅1km13分)
石黒太郎光弘が築城した福光城址の一部。江戸時代後期に風雅人交遊の場として小亭が建てられ榎園と命名された。
- ⑥ 巴塚の松
(JR福光駅1.1km15分)
巴御前が晩年をすごした草庵の跡に、巴の遺言で植えられたという樹齢約七五〇年の松。
- ⑦ 高樞城
(JR福光駅3.4km43分)
石黒光弘の館跡ではないかと推定されている城。
- ⑧ 太美氏本拠地
(JR越中山田駅7.9km100分)
石黒党の一人・太美光能の館があったという場所。
- ⑨ つしのけ
(JR越中山田駅1.7km22分)
倶利伽羅合戦のあと、角に松明をつけた牛が走ってきたという伝承が残る場所。
- ⑩ 矢留・牛ヶ原
(JR越中山田駅4.1km52分)
倶利伽羅合戦で逃げてきた暴れ牛という伝承が残る場所。
- ⑪ 義仲・巴蹄の石
(JR福光駅3.2km40分)
義仲と巴が馬を歩かせた蹄の跡が残った石。しかし今は工事でなくなっています。
- ⑫ 西勝寺地籍
(JR福光駅2.5km32分)
巴が荒馬の手綱を足で踏んで沈めた場所。源兵衛屋敷跡。
- ⑬ 田中八幡宮
(JR福光駅2km15分)
加賀藩能氏(十村役)寄進による巴御前の絵馬がある神社。

俱利伽羅合戦志雄山ルートと加賀の武士団

石川県は義仲伝承でもっとも特徴的なのは「木曾街道」の存在である。これは北陸合戦での北陸諸将・平家・義仲軍勢の進軍および撤退ルートが重なり合った地点の総称で、県全域に点在している。それらの地名は「源平盛衰記」をはじめ「平家物語諸本」に克明に記され、またその近くの神社には伝承や祭りが合わせて語り継がれていることが多い。

加賀武士の中心的存在である林と富樫は平安時代初期に活躍した藤原利仁將軍を祖とし、代々加賀國の在庁官人を務めていた豪族である。特に林氏は摂関家の藤原頼長と結び官位を得るなど、勢いが盛んで、次第に手取川の扇状地に同族を配置して小武士団を形成した。それに対し富樫氏は泉野扇状地に勢力を広げていた。また加賀から越前にかけての山間部では白山神社の勢いが強く、神社をよりどころにする武士が都に対して反抗行動を繰り返していたことが富山・長野県とは違う大きな特徴であり、林・富樫らに在庁官人と白山神社は、時には協調し時には対立しながらも、平家という共通の敵の存在の前で共に義仲軍勢に加わり戦うこととなった。北陸緒戦で義仲がさまざまな神社に祈禱したり奇進しているのは、白山神社をはじめとする神社のネットワークに配慮したものとみられている。

珠州市 七尾市 穴水町 中能登町 志賀町 かほく市

能登國は海運で栄え、平安末期に藤原頼長の莊園が開かれたり、國府の役人に平家が当たるなど都から見て魅力的な地域だった。それだけに地元の武士の活動も盛んで、源平合戦には独自の動きを見せている。



- ①日置郷
(能登空港40km車で40分)
能登武士・日置氏の所領。
- ②日置郷
(のと鉄道穴水駅2.7km35分)
能登武士・日置氏の所領。
- ③能登國府
(JR七尾駅2.7km34分)
養和元年(一一八一)七月、義仲が北陸へ進出したことと呼応して、能登武士が反乱を起こした場所。国主・平教経が派遣していた目代が追放され、郎党も首をはねられた。
- ④土田荘
(のと鉄道七尾線笠師保駅10.5km130分)
能登武士・土田氏の本地地。
- ⑤得田
(のと鉄道七尾線笠師保駅4.6km57分)
能登武士・得田氏の本地地。養和元年(一一八一)十一月二十四日藤原(得田)章通が得田・大町・甘田・神代保の四か所の地頭職を安堵された。という義仲の文献が残っていた。対平氏の能登武士団の反乱を受けてのものと思われる。
- ⑥館開の由来
(のと鉄道七尾線笠師保駅6km76分)
得田氏の居城・得田城があった。館を開いたことまわつる地名。
- ⑦武部
(JR能登二宮駅2.6km33分)
能登武士・武部氏の本地地。
- ⑧一青庄
(JR長川駅1.2km15分)
藤原頼長の莊園だったが没収され後白河院の後院領になった。義仲の父義賢が派遣されていた。
- ⑨白生
(JR宇野気駅2km25分)
俱利伽羅合戦にむけて平家が二手に分かれ、志雄山に向かう平家軍勢が通った地。





津幡町 内灘町

俱利伽羅合戦の舞台。平家の大軍は津幡から金沢まで続いていたといい、合戦の際には数えきれないほどの平家の大軍がひしめいていたのだろう。また河北潟に面した津幡域は、当時加賀・能登・越中の三国の結節点にあり交通の要衝として栄え、有力な加賀武士・井家氏が現れた。井家範方は俱利伽羅合戦の前に平家と戦い壮絶な最期を遂げるが、一族の井家・津幡氏は義仲の最期まで付き従った。

① 俱利伽羅樋口のルート
 (JR俱利伽羅駅 2.9 km 37分)
 俱利伽羅合戦の際、樋口が林・富樫らと平家の背後をついた搦手のルート。北国街道沿いに2.2 kmにわたる。

② 富田
 (JR俱利伽羅駅 1.5 km 20分)
 俱利伽羅合戦の際、樋口の搦手がここを通った。

③ 俱利伽羅の堂
 (JR俱利伽羅駅 3.4 km 43分)
 俱利伽羅合戦の際、平家が布陣したお堂。

④ 手向神社と長楽寺
 (JR俱利伽羅駅 3.4 km 43分)
 源平盛衰記の「俱利伽羅ノ堂」にあたる寺社。かつて義仲奉納の長刀があったが、終戦のころ供出して行方が分からなくなった。現在は俱利伽羅不動寺になっている。

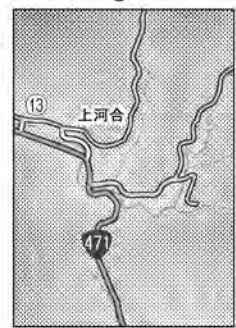
⑤ 竹橋
 (JR俱利伽羅駅 2.5 km 31分)
 俱利伽羅合戦の搦手の攻撃地点。平家軍勢が竹橋を通って峠に入った後、樋口が率いる搦手がここに到り、待ち伏せし、峠から逃げ降りてくるころを攻撃したといふ。

⑥ 平家の進軍ルート
 (JR中津幡駅 2.1 km 27分)
 俱利伽羅へ向かう平家の軍勢が通った。「荒井」にある。

⑦ 津幡
 (JR中津幡駅 0.3 km 5分)
 交通・軍事上の要衝。井家庄の一部。俱利伽羅合戦の際、平家軍勢は津幡から森本まで続いていたといふ。

⑧ 大西山(津幡城跡)
 (JR本津幡駅 0.3 km 4分)
 平維盛の軍勢が着陣した地。加能越三力国の結節点にある。

⑨ 井家庄
 (JR本津幡駅 1.6 km 21分)
 加賀武士・津幡氏の本拠地。長講堂領。



⑩ 室戸
 (JR宇野気駅 4.9 km 62分)
 俱利伽羅合戦に向けて平家軍勢が志雄山に向かう際に通った場所。

⑪ 平家の進軍ルート
 (北陸鉄道内灘駅 4.3 km 54分)
 俱利伽羅合戦の際、志雄山に向かった平家軍勢のルート。

⑫ 俱利伽羅神社
 (JR俱利伽羅駅 2.1 km 25分)
 江戸時代に描かれた四曲一双の「源平俱利伽羅合戦図屏風」がある神社。

⑬ 牛舞坊
 (JR俱利伽羅駅 1.1 km 127分)
 俱利伽羅合戦にちなんだ伝統芸能。上河合地区に残っている。

⑭ 九折白山神社
 (JR俱利伽羅駅 2.2 km 26分)
 明治後期の「源平合戦大絵馬」が残っている神社。

⑮ 平知度の首塚
 (JR中津幡駅 2.3 km 27分)
 平知度の首塚と言われる場所。近隣には「平」のつく平村、平林などの姓が多くみられる。

⑯ 兼平の湯
 (JR俱利伽羅駅 4.4 km 53分)
 今井兼平が矢傷を負ったといふ天然の湯水で傷を癒したといふ言い伝えがある湯。兼平の湯と呼ばれていたが、現在温泉施設などはない。

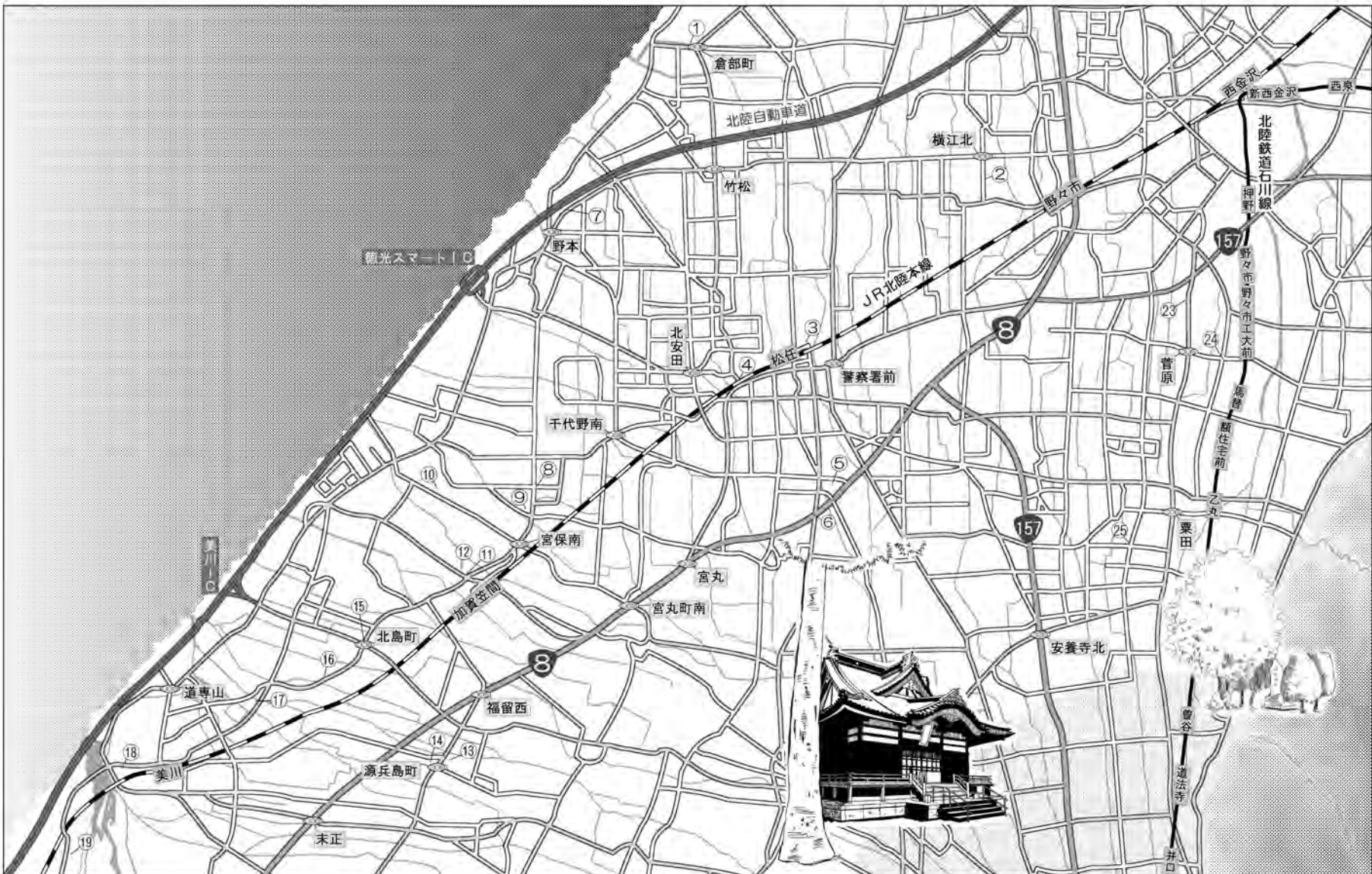
⑰ やたの湯
 (JR能瀬駅 3 km 86分)
 俱利伽羅合戦で義仲に敗れた平維盛が傷を癒したのが始まりという温泉。

⑱ 王城
 (JR津幡駅 1.2 km 14分)
 俱利伽羅合戦の後、義仲がしばらく居住した所。

白山市野々市市

中世加賀の一大拠点。有力武将・林・富樫氏の本拠地があり、周辺には同族の武士達が広く分布していた。また白山神社は貧困に苦しむ農民から有力武士まで広く崇敬を集め、林・富樫氏とは対立したり結びついたりを繰り返していたが義仲の登場により協調関係に入る。義仲進軍時の伝承も多く関わりの深さが伺われる。

- ① 浜倉部
(JR松任駅4・3km55分)
安宅で平家軍勢に敗れ退却する林・富樫らが通った場所。
- ② 横江庄
(JR野々市駅1・1km14分)
奈良東大寺の初期荘園。東大寺による経営が行き詰まり、林光明の所領になって



- ③ 義仲の本陣
(JR松任駅0・2km3分)
北陸合戦の際、義仲が本陣を置いた。
- ④ 成村
(JR松任駅0・8km11分)
木曾街道が通っていた場所。
- ⑤ 日吉神社
(JR松任駅1・7km21分)
加賀武士・倉光成澄の尊崇を受けた神社。付近には貴船社・菅原社もあり同じように尊崇されていたが、明治時代に合祀されている。
- ⑥ 倉光氏本拠地
(JR松任駅1・9km24分)
義仲に従って上洛した加賀武士・倉光成澄の本拠地。
- ⑦ 相河
(JR松任駅3・7km47分)
平家に敗れた北陸諸將が撤退していく際通過した場所。
- ⑧ 正永寺
(JR加賀笠間駅1・5km19分)
義仲をしのんで建てられた木曾山堂を前身とする寺。
- ⑨ 宮保八幡神社
(JR加賀笠間駅1・4km17分)
北陸合戦の際、寿永二年に義仲が祈願したという神社。
- ⑩ 黒瀬の由来
(JR加賀笠間駅1・7km21分)
北陸合戦にまつわる伝承地。寿永二年に木曾義仲が来た時、五月雨による洪水で軍を進めることが出来ず、笠間八幡社へ義仲は水難がないように祈った。すると一夜明けて水が引き瀬一か所が黒く見えたので「黒瀬」と名づけたという。
- ⑪ 木曾街道
(JR加賀笠間駅0・3km4分)
松任から北安田、宮保、笠間、米光、美川、根上、安宅をたどり、小松に至る街道。
- ⑫ 笠間神社
(JR加賀笠間駅0・5km6分)
義仲が水難がないように祈った神社。兜を奉納した。義仲弓姫の井戸、弓掛の桜(枯死したので二代目)がある。
- ⑬ 武鸞稲神社
(JR加賀笠間駅2・8km35分)
北陸合戦に関する神社。社記によればかつては春日島というところがあり、一八二二年に義仲が平氏を追って来た時、根井小弥太が同社の森に陣し八幡神を合わせ祭ったと伝えられている。

⑭源兵島の由来
(JR加賀空閑駅2・8km3.5分)
北陸合戦にまつわる地名。平家を造ってきた義仲の軍勢が洪水のため比叡河(手取川)を渡ることが出来ず、一時駐屯したことによる。

⑮北島
(JR加賀空閑駅1・6km2.0分)
木曾街道が通る。

⑯米光
(JR美川駅2・1km1.7分)
木曾街道が通る。

⑰てふやの庄
(JR美川駅1・3km1.7分)
長屋・蝶屋・朝屋とも書く荘園。義仲が寿永二年(一一八三)五月多田八幡に寄進したと平家物語にある。多太神社に残る義仲のものという添え状には二十一日に蝶屋十三町を寄進したとある。

⑱藤塚
(JR美川駅0・7km0.9分)
平家の軍勢に敗れた林・富樫らの退却地点であり、義仲軍勢に追われた平維盛の退却地点でもある。



⑲今湊
(JR小舞子駅0・5km7.7分)
平家の軍勢に敗れた林・富樫らの退却地点であり、義仲軍勢に追われた平維盛の退却地点でもある。

⑳金劔宮
(北陸鉄道鶴来1km1.3分)
義仲の寄進をつけたという宮。俱利伽羅合戦の際、勝利を収めた義仲の前に金劔宮の神宝が出現したため靈威に感謝した義仲が鞍つきの馬二〇頭を寄進した。

㉑白山比咩神社
(北陸鉄道鶴来2・9km3.6分)
加賀一ノ宮。義仲は寿永二年に林光明の所領・横江庄を寄進した。

また義仲が戦勝祈願の願文を
加賀馬場白山本宮に進上した。

㉒白山河内
(北陸鉄道鶴来6km7.5分)
平家の軍勢に敗れた林・富樫らの退却地点。

㉓野市(野々市市)
(北陸鉄道野々市工大前駅0・8km1.0分)
中世加賀の政治経済の中心地だった。

㉔富樫館
(北陸鉄道馬場駅0・5km7.4分)
富樫氏の本拠地。平家の軍勢に敗れた富樫が退却したと推定される。

㉕林郷
(北陸鉄道乙丸駅1・3km1.7分)
林氏の本拠地。白山本宮領。

㉖朝日の由来(川北町)
(JR美川駅2・5km3.2分)
義仲にまつわる地名。義仲が湊に上陸したとき朝日が昇っていたことに由来する村名。



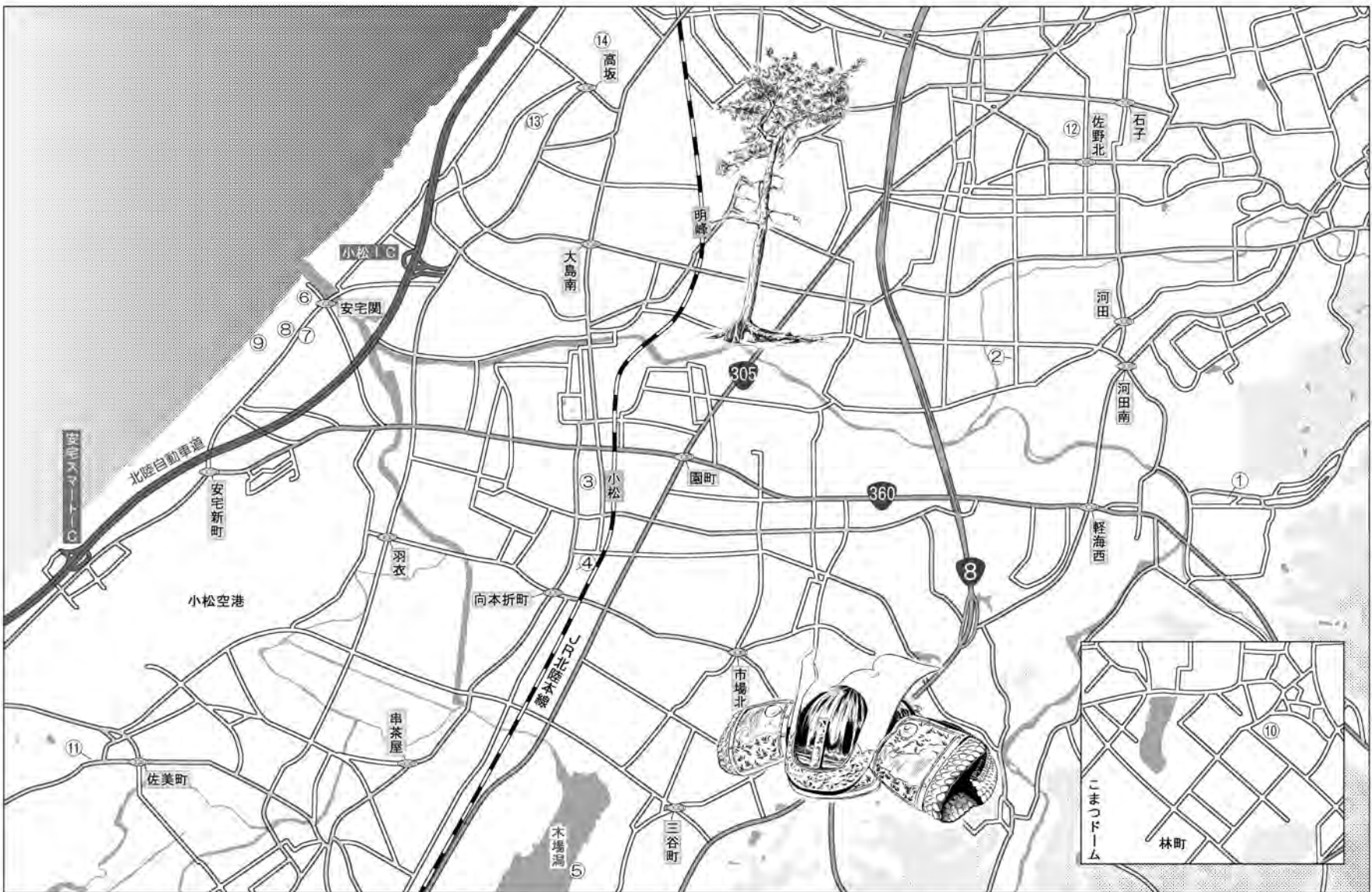
斎藤実盛と義仲

多くの北陸の武士達が義仲の元で戦った中、北陸出身でありながら、軍勢に加わらなかった武士が斎藤実盛である。斎藤実盛はその名字が示す通り、林・富樫らと同じ藤原利仁將軍を祖とする武士で越前の出身だったが、武蔵国(埼玉県)に所領を得て移住し、源義朝(頼朝の父)源義賢(義仲の父)とも知り合っていた。武士の「一人の主君に仕えたら死ぬまで忠誠を誓うもの」というイメージは戦国時代以降に作られたもので、源平合戦の時代は自分と家族・一族、自分の土地を守るために、主君を次々に変えたり、兄弟や一族が違う主君に仕えることが当然のことであった。そのため斎藤実盛は、源義朝と義賢の二人が対立関係の末、義賢が討ち取られる事件が起こると、表面上は義朝に味方したが、生き残った義賢の息子(のちの義仲)を密かに保護し、信濃に逃がした上、源氏が平治の乱で滅びると平家に仕えるようになった。しかも源平合戦では自らは平家と共に転戦を重ねたものの、子孫を平家方と源氏方に分け、自分が敗死しても家が残るように行動していたのである。

義仲は命を助けられた恩を忘れず実盛を助けたいと思っていたが、実盛は自らの老齢を踏まえてこれ以上主君を変えることを潔しとせず、源平合戦を最後の花道と決めた。そこで素性を隠すため大將のような鮮やかな錦の衣を着て、白髪を黒髪に染め、撤退していく平家の楯となり一騎打ちの末出身地である北陸で深く死を迎えたのだった。

義仲は実盛の頭をみてすべてを理解し「武士の鑑である」と感銘を受け、手厚く葬ったと言われている。その生きざまは後世の人の心もとらえ、能・歌舞伎の題材で実盛の物語は現在も親しまれている。

小松市 能美市



北陸における源平合戦の激戦地の一つだが、あまり知られていない。特に「安宅」での平家と北陸諸將の合戦は加賀・越中の武士達が国を守るため多数の犠牲払った感動的な戦いだった。

① 涌泉寺
(JR明峰駅7・1km 37分)
北陸での源平内乱の契機となった「安元事件」の舞台。安元二年(一一七六)八月加賀国司藤原師高の弟・師経が紛争を起こして寺を焼き払ったというもの。この

② 加賀国府
(JR明峰駅4・5km 56分)
加賀の国府があったと推定されている。

事件が発端となり都での反平家の動きが起こった。

③ 法界寺
(JR小松駅0・3km 4分)
平重盛開基の寺。小松は重盛の所領であったため地名となったといういわれがある。

④ 多太神社
(JR小松駅1・2km 16分)
齊藤実盛とゆかりが深く実盛着用の鎧兜、義仲奉納の鍬などがある神社。

⑤ 成合の池
(JR栗津駅4・1km 52分)
平家に敗北し加賀を転戦していた北陸諸將が通った地点。

⑥ 安宅住吉神社
(小松空港3km 38分)
平家に一矢報いたため安宅の戦いに挑んだ北陸諸將が陣を置いた神社。

⑦ 義仲町
(小松空港2・2km 28分)
義仲にちなんで名づけられた新地名。

⑧ 安宅
(小松空港2・6km 32分)
古代からの海川陸の交通の要衝。加賀国府の外港で、商業流通や信仰の拠点だったため戦場になった。

⑨ 安宅の渡し
(小松空港2・9km 37分)
平家に一矢報いたため北陸諸將が意地をかけて平氏の軍勢と激突した戦跡。

⑩ 林氏館跡
(JR栗津駅2・5km 31分)
加賀武士・林六郎の館跡。

⑪ 佐見
(JR栗津駅4・6km 58分)
平家に敗北し加賀を転戦していた北陸諸將が通った地点。

⑫ のみの庄
(JR明峰駅4・8km 60分)
現在の小松市八幡町あたりを中心に広がっていた荘園。長講堂領川後白河院領。板津氏が管理。義仲が俱利伽羅合戦のち菅生石部神社に寄進した。

⑬ 根上の松
(JR寺井駅2・1km 27分)
平家に敗北し安宅城を退いた北陸諸將を逃がすため、井家次郎範方らが楯となつて奮戦したが討たれたという戦跡。

⑭ 郡家荘
(JR寺井駅2・6km 33分)
加賀武士・板津氏が管理する荘園。現在の小松市と能美市根上地区を中心に広がっていた。

加賀市

①忌浪神社
(JR加賀温泉駅1.7km22分)
北陸合戦の際焼失した神社。のちに再建した。

②菅生石部神社
(JR大聖寺駅1.9km24分)
義仲が平家を篠原合戦で破った時「のみの庄」を寄進した神社。

③極楽林
(JR大聖寺駅2.5km32分)
義仲軍勢に負けた平家軍勢が敗走した場所。

④熊坂庄
(JR大聖寺駅2.1km27分)
八条女院の荘園。平頼盛が知行していた。

⑤塩越
(JR牛ノ谷駅8.3km102分)
燧ヶ城から敗走した北陸武士団を追って平氏が加賀に入り陣した場所。

⑥今城寺氏本拠地
(JR動橋駅4.3km54分)
加賀武士・今城寺光平の本拠地。

⑦成合の池(柴山湯)
(JR動橋駅4.2km52分)
燧ヶ城から敗走した北陸諸將が加賀を転戦していた時通った場所。

⑧篠原古戦場
(JR動橋駅4.7km60分)
北陸諸將が築いた城。燧ヶ城から転戦したが敗北した。俱利伽羅合戦の後は、義仲に追われた平氏が転戦し、斎藤実盛が命を落とした。現在首洗池周辺を公園として整備し、平家物語のシーン再現した銅像がある。

⑨潮津神社
(JR動橋駅4.3km55分)
斎藤実盛の人氣を不動のものとした伝説の地。この付近の領主は諏訪氏で潮津神社を崇敬していたという。
一四一四年時宗潮津道場での念仏の時に斎藤実盛の霊が現れ、その様子が都にも伝えられて評判となり「能・実盛」が成立するに至った。その後道場は西光寺となった。

⑩成合
(JR加賀温泉駅5.6km70分)
柴山湯と海岸に挟まれた付近にあったとみられる源平の古戦場。北陸諸將の敗走・義仲軍勢の平家追撃の激戦地だった。

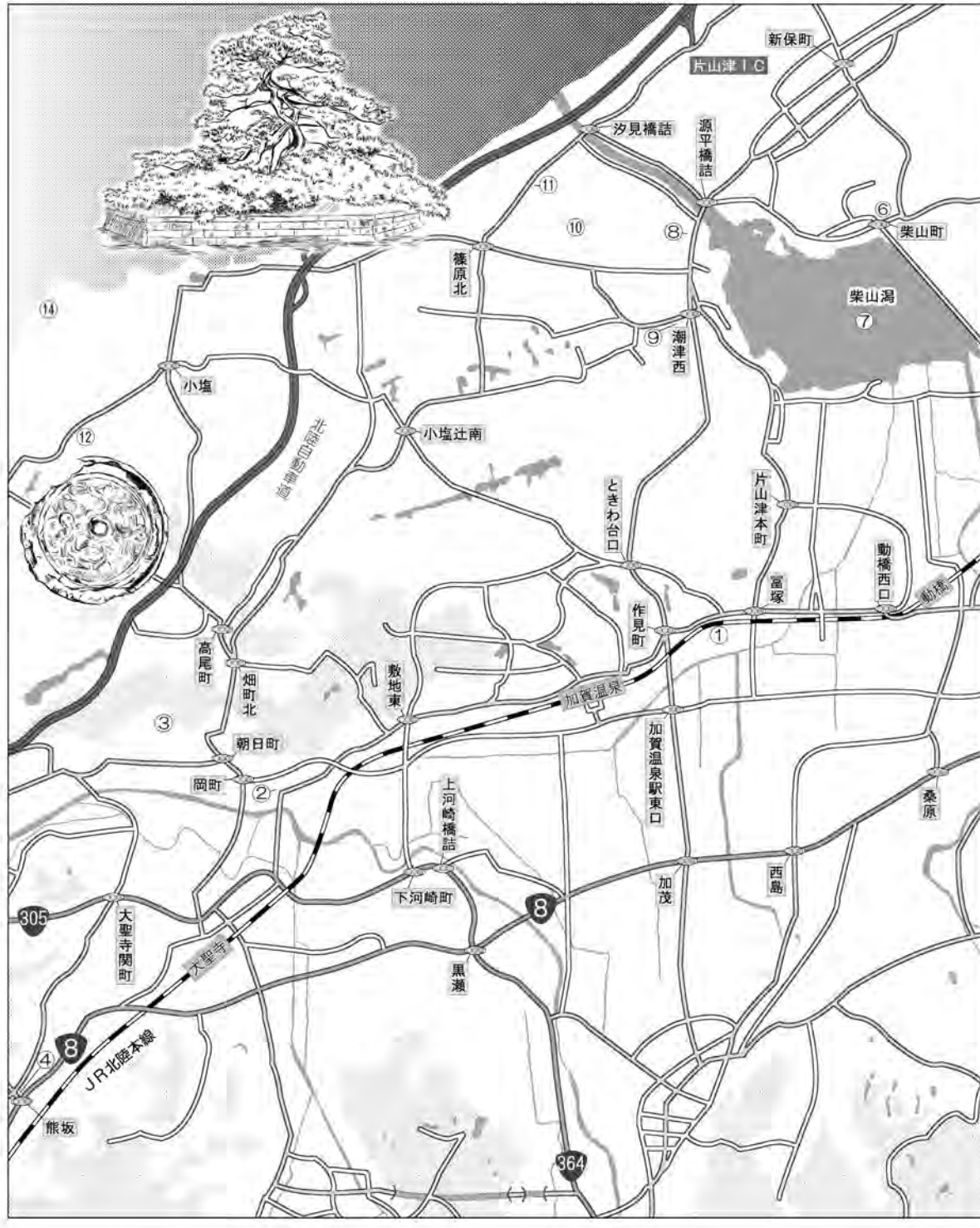
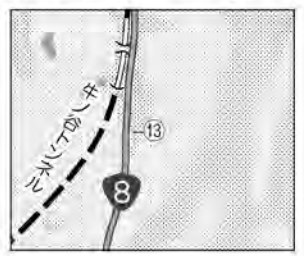
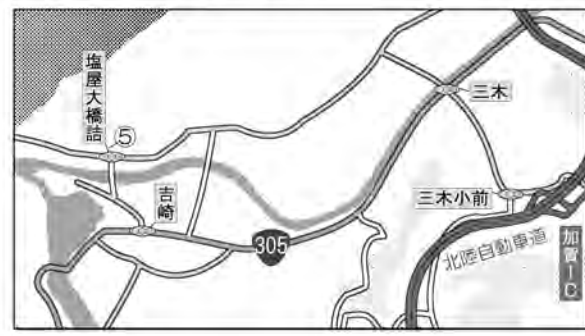
⑪実盛塚
(JR加賀温泉駅5.8km72分)
斎藤実盛を葬ったと伝えられる塚。現在塚の上にとても大きな松がある。

燧ヶ城から俱利伽羅へ向かう平家、俱利伽羅から都への義仲軍勢：それぞれの進軍ルートとなった地。特に平家敗走時に斎藤実盛が命を落とした舞台として有名である。

⑫鏡の池と白山神社祭礼
(JR加賀温泉駅6.5km82分)
実盛が投げ込んだという手鏡が池に沈んでいる。毎年九月十五日ごろ行われる祭礼の前日に池の水を抜き鏡を拝する。

⑬熊坂越
(JR牛ノ谷駅2.6km33分)
交通の要衝。燧ヶ城から敗走した北陸諸將を追って平氏が侵入し、義仲軍勢に追われた平氏が都へ逃げ戻った。古代の北陸道はここを通ったという説もある。

⑭源平合戦供養塔と木曾街道
(JR加賀温泉駅8.8km105分)
風光明媚な海沿いを木曾街道がある。そのわきに源平合戦供養塔がある。橋立町と黒崎町の境界付近にあたる。



中原兼遠 (長野県木曾町林昌寺など)

義仲の養父。信濃権守を務めていたため、国府周辺と見られる松本市や領地であった木曾町にゆかりが深い。

小枝御前 (長野県朝日村光輪寺など)

義仲の母。埼玉県嵐山町から幼い義仲を抱いて、信濃に逃れ来た。中原兼遠に保護され、朝日村、塩尻市、木曾町にゆかりが深い。

巴御前 (富山県南砺市巴松など)

義仲の妻。義仲と共に各地を転戦し足取りを残している。義仲の死後いつた信濃に戻った後、越中に移り住んだという。

今井兼平 (長野県松本市今井など)

義仲の乳兄弟。随一の家臣。義仲のため、信濃・越後・越中各地に館や城を築くなど、地盤固めをしたり、戦で先陣を任される事が多かった。

樋口兼光 (長野県辰野町樋口本拠地など)

義仲の乳兄弟。義仲の隠し城の麓に本拠地をもつ。

根井氏 (長野県佐久市など)

大弥太行親が義仲の軍事的後見人。小弥太が義仲四天王として活躍。

大夫坊覚明 (小矢部市通生護国八幡宮など)

義仲の祐筆(参謀かつ秘書)。都で学僧としてキャリアを積むが都の政権の不安定さから戦場に身を投じる。平家物語の作者ではないかとも言われている。信濃の滋野氏の一族海野氏の出身とも考えられている。

楯六郎 (長野県佐久穂町など)

木曾四天王の一人。兄・根井小弥太と共に義仲軍勢で活躍。

手塚光盛と諏訪神党

(長野県下諏訪町諏訪大社など)

義仲の重臣。信濃の大武士団、諏訪神党の代表として活躍。

長瀬判官代 (長野県塩尻市・上田市)

義仲に味方した信濃源氏。本拠地は上田市だが、塩尻、松本など広い地域に縁深い。義仲軍勢で活躍。

栗田判官範覚 (長野市源太塚など)

善光寺をよりに活動する武士団を率いて義仲軍勢に参戦。

山吹御前 (長野県麻績村山吹堂など)

義仲の妻の一人。

葵御前 (富山県小矢部市葵塚など)

義仲の妻の一人。俱利伽羅合戦で討死にする。

清水義高 (長野県上田市正海清水など)

義仲の長子。頼朝と義仲の対立を避けるため鎌倉に送られる。

岡田親義 (長野県松本市岡田神社など)

義仲に味方した信濃源氏。俱利伽羅合戦で討死する。

海野幸氏と滋野一族

(長野県東御市白鳥神社など)

滋野一族は長野県東信地方に広く勢力を持つ大武士団。海野幸氏は清水義高の従者。義高と共に鎌倉へ送られ、義仲・義高亡き後、小室光兼とともに信濃武士の御家人化、義仲残党の保護に尽力。真田氏の祖。

小室光兼 (長野県小諸市諸など)

滋野一族に属する。清水義高の教育係で烏帽子親だったと言われている。横田河原合戦では名がみえるが早くから頼朝方に属し、信濃を勝ち得て義仲敗死後の信濃武士の御家人化に務めた。

源頼朝 (埼玉県ときがわ町慈光寺など)

義仲の従兄。鎌倉幕府を開く。

源範頼 (埼玉県吉見町)

義仲の従兄・源頼朝の弟。義仲追討の命を受け都へ赴く。

源義平 (埼玉県東松山市)

義仲の従兄。義仲の父・義賢を討つ。保元・平治の乱で活躍する。

源義賢 (埼玉県嵐山町など)

義仲の父。大蔵館事件で討たれる。

北陸宮 (富山県朝日町賜子八幡宮など)

源氏拳兵の契機を作った以仁王の子。富山県朝日町で匿われていた。

宮崎長康 (富山県朝日町宮崎城など)

越中の武将。北陸における義仲軍勢の中心的存在を占める。北陸宮を保護する。

石黒光弘 (富山県南砺市福光城跡など)

越中の武将。宮崎氏と同族関係にあり、北陸における義仲軍勢の中心として活躍。

林光明 (石川県野々市市など)

加賀の武将。林氏は在庁官人出身で都ともパイプを持つ。加賀の広い範囲に一族郎党があり北陸における義仲軍勢の中心的存在を占める。

富樫入道仏誓 (石川県金沢市など)

加賀の武将。北陸における義仲軍勢の中心的存在。林氏と同族関係にある。

井家範方 (石川県津幡町など)

加賀の武将。壮絶な最期を遂げる。

津幡隆家 (石川県津幡町)

井家荘を本拠地とする武士。義仲と共に京に上り義仲の最期まで寄り添った。

斎藤実盛 (石川県加賀市・埼玉県熊谷市など)

義仲とゆかりが深い平家方の武将。越前出身で武蔵育ち。父を失った幼い義仲を一時保護し、信濃へ送った。

富山重忠 (埼玉県深谷市・嵐山町など)

武蔵の武将。富山氏は坂東八平氏の流れをくむ。平家に仕えていた関係で父重忠は平家方。重忠は頼朝軍に参加した。後源に御家人として重用された。

義仲略年表

一一五四	義仲生まれる
一一五八	父・義賢が殺され、武蔵から信濃へ逃れる
一一五七	保元の乱。平清盛が台頭
一一五八	後白河法皇の院政始まる
一一五九	平治の乱。平清盛が源義朝を倒す
一一六〇	京都の石清水八幡宮で元服
一一八〇	以仁王の令旨が出される
一一八〇	以仁王と源頼政が平家に倒される
一一八二	平清盛が六四才で死ぬ
一一八二	越後平氏が横田河原の合戦で破る
一一八三	頼朝軍が信濃へ攻め入る。義高を鎌倉に送る
一一八三	平維盛軍が義仲討伐に出発
一一八三	義仲方の旗が城(楢井県)が陥落する
一一八四	股石野(富山県)合戦
一一八四	俱利伽羅合戦(富山・石川)
一一八四	安宅・篠原(石川県)の合戦
一一八四	平家軍を壊滅させる
一一八四	蒲生野(滋賀県)へ
一一八四	比叡山が義仲に味方する
一一八四	平家が都落ちする
一一八四	義仲無血入京
一一八四	平家追討の院宣を受ける
一一八四	官位を受けるが次期天皇の人選をめくり、後白河院との間が悪化
一一八四	平家追討のため山陽道へ
一一八四	水島の戦いに敗れる
一一八四	頼朝に關東・中部地方の支配を許可する「一〇月宣旨」が出され、義仲と院の関係は最悪に
一一八四	院の側近を倒し政権を握る
一一八四	義仲征夷大將軍に
一一八四	宇治川の合戦
一一八四	義仲軍、義経らに敗れる
一一八四	近江栗津に死す

熊谷直実 (埼玉県熊谷市)

武蔵の武将。源義朝の家臣として保元・平治の乱で活躍。頼朝拳兵時には平家方の家物語の平家盛との逸話が有名。その後、出家し全国各地にゆかりの寺院がある。

岡部六弥太忠澄 (埼玉県深谷市)

武蔵の武将。源義朝の家臣として保元・平治の乱で活躍。頼朝拳兵に当たり参陣。義仲追討一の谷の戦いなどで活躍。妻は富山重忠の妹・玉ノ井。

榛沢六郎成清 (埼玉県深谷市)

富山重忠の乳兄弟。保元・平治の乱で源義朝の下に名がみえる。その後、頼朝の源氏に仕えたため、頼朝に味方する。頼朝の平氏を受け、富山重忠に頼朝の頼朝氏の方を託いた。義仲追討人と頼朝の頼朝氏を合戦に重忠についで参戦。北条氏に謀反の汚名を着せられた重忠と共に戦死。

マップに登場する義仲ゆかりの人々